

令和9年度

日本大学大学院歯学研究科

概 要

日本大学教育憲章

日本大学は、本学の「目的及び使命」を理解し、本学の教育理念である「自主創造」を構成する「自ら学ぶ」、「自ら考える」及び「自ら道をひらく」能力を身につけ、「日本大学マインド」を有する者を育成する。

日本大学マインド

・日本の特質を理解し伝える力

日本文化に基づく日本人の気質、感性及び価値観を身につけ、その特質を自ら発信することができる。

・多様な価値を受容し、自己の立場・役割を認識する力

異文化及び異分野の多様な価値を受容し、地域社会、日本及び世界の中での自己の立ち位置や役割を認識し、説明することができる。

・社会に貢献する姿勢

社会に貢献する姿勢を持ち続けることができる。

「自主創造」の3つの構成要素及びその能力

<自ら学ぶ>

・豊かな知識・教養に基づく高い倫理観

豊かな知識・教養を基に倫理観を高めることができる。

・世界の現状を理解し、説明する力

世界情勢を理解し、国際社会が直面している問題を説明することができる。

<自ら考える>

・論理的・批判的思考力

得られる情報を基に論理的な思考、批判的な思考をすることができる。

・問題発見・解決力

事象を注意深く観察して問題を発見し、解決策を提案することができる。

<自ら道をひらく>

・挑戦力

あきらめない気持ちで新しいことに果敢に挑戦することができる。

・コミュニケーション力

他者の意見を聴いて理解し、自分の考えを伝えることができる。

・リーダーシップ・協働力

集団のなかで連携しながら、協働者の力を引き出し、その活躍を支援することができる。

・省察力

謙虚に自己を見つめ、振り返りを通じて自己を高めることができる。

目 次

研究科及び専攻における人材の養成に関する目的その他の
教育研究上の目的について

- ・ 歯学研究科 3つのポリシーについて
- ・ 学位論文の審査基準について
- ・ 大学院歯学研究科について

1. 歯学研究科の沿革と現況	1
2. 歯学研究科の在籍者数, 令和9年度募集人員及び学費	2
3. 歯学研究科の構成（分野紹介）	3
4. 学位（博士）論文審査	30
5. 奨学金制度	30
6. リサーチ／ティーチング・アシスタント制度	31
7. 海外派遣制度	31
8. その他	31

研究科及び専攻における人材の養成に関する目的その他の 教育研究上の目的について

「歯学研究科」

歯科医学の教育・研究活動に必要な深い教養と高度の研究能力及びその基礎となる豊かな学識とともに、歯科医学の発展に寄与しうる教育・研究を指導する能力を養うことを目的とする。

専攻分野の教育者及び研究者として自立した活動を行い、さらに歯科医学教育・先端的歯科診療等の指導に従事するために必要な深い教養と高度の研究能力の養成及びその基盤となる豊かな学識を養うことを目的とする。

「歯学専攻」

多岐にわたる歯科医学の高度にしてより幅広い知識と先進的医療技術を有す教育者及び研究者の育成を図るべく、口腔構造機能学分野、応用口腔科学分野、口腔健康科学分野の3分野を設置している。これらは、歯科基礎系と歯科臨床系を融合した分野であり、学際領域の推進により複数の教員による指導体制のもとに、教育及び臨床に直結した歯学研究、専門医養成することを目的とする。

歯学研究科3つのポリシーについて

ディプロマ・ポリシー（学位授与に関する方針）

歯学研究科博士課程に所定の修業年限以上在学し、修了に必要な所定の単位（30単位以上）を修得し、必要な研究指導を受け、博士論文の審査及び最終試験において、専攻分野に新たな知見を与え、歯科医学の発展に寄与し、教育・研究者としての豊かな学識と高度な技術が認められた者に博士（歯学）の学位を授与する。

なお、学位審査では、その研究が一定以上の水準を示すインパクトファクターの付与された研究雑誌に筆頭著者として受理された論文を提出するよう推奨している。

<自ら学ぶ>

DP1

コンピテンス：豊かな知識・教養に基づく高い倫理観

コンピテンシー：生命の尊厳を理解し、法と倫理に基づいた医療を実践するために必要な研究が実践できる。

DP2

コンピテンス：世界の現状を理解し、説明する力

コンピテンシー：国際社会における科学の現状や背景を把握し、世界の医療・保健・福祉の役割を理解して、研究に取り組むことができる。

<自ら考える>

DP3

コンピテンス：**論理的・批判的思考力**

コンピテンシー：新たな創造をめざし、得られた多岐にわたる知識や情報を基に、論理的で批判的な思考力で、最先端の独創的な研究を行うことができる。

DP4

コンピテンス：**問題発見・解決力**

コンピテンシー：自らの研究課題や問題を見つけ、その解決のために必要な研究ができる。

<自ら道をひらく>

DP5

コンピテンス：**挑戦力**

コンピテンシー：新たな研究課題に積極的に挑戦し続け、自らの道をひらくことができる。

DP6

コンピテンス：**コミュニケーション力**

コンピテンシー：歯科医学研究を含む自然科学を探究するための必要なコミュニケーションが実践でき、自らの考えを世界に発信することができる。

DP7

コンピテンス：**リーダーシップ・協働力**

コンピテンシー：歯科医学を探究するための責任ある研究を実践するリーダーシップと協働力を養うことができる。

DP8

コンピテンス：**省察力**

コンピテンシー：歯科医学研究者・教育者として生涯にわたり、振り返りを行うことができ、自然科学領域の研究活動において自らを高めることができる。

カリキュラム・ポリシー（教育課程の編成及び実施に関する方針）

自主創造の気風を自ら実践し、歯科医学の研究・教育活動に必要な高い教養と研究能力及びその基礎となる科学的思考力とともに、自立して研究を遂行・展開することができ、歯科医学の発展に寄与しうる豊かな学識と人間性を兼備した教育・研究者の育成を目的とする。

<自ら学ぶ>

CP1 豊かな知識・教養に基づく高い倫理観

主科目、選択科目および総合特別講義の履修と研究活動を通じて、社会人としての品格と研究・教育者となるために必要な倫理観や自覚を育成する。

CP2 世界の現状を理解し、説明する力

主科目、選択科目および総合特別講義の履修および基礎・臨床・社会医学の研究成果を基に、国際社会での研究活動で活躍できる能力を養う。

<自ら考える>

CP3 論理的・批判的思考力

主科目、選択科目および総合特別講義の履修と研究活動を通じて、論理的・批判的思考力と総合的な判断能力を有する研究者・教育者を育成する。

CP4 問題発見・解決力

主科目、選択科目および総合特別講義の履修と研究活動を通じて、歯科医学研究に必要な知識を幅広く体系的に学修し、リサーチマインドに必要な探求心と問題解決する力を養成する。

<自ら道をひらく>

CP5 挑戦力

研究によって明らかとなる新たな知見から、さらに課題を見つけ出し、それに挑戦し続けるリサーチマインドを持った研究者・教育者を養成する。

CP6 コミュニケーション力

国際的な研究活動を積極的に行う中で、適切なコミュニケーション力を養い、国際的・学術的研究を進めるための能力を育てる。

CP7 リーダーシップ・協働力

他分野の研究者と連携と協働し、良好な人間関係を構築しながら、広い視野を持つ国際的なリーダーシップが執れる研究者を育成する。

CP8 省察力

主科目、選択科目および総合特別講義の履修と研究活動を通じて、自己の向上の必要性を理解し、研究・教育者として生涯にわたる向上に努める姿勢を身につける。

アドミッション・ポリシー（入学者の受入れに関する方針）

歯科医学に関する豊かな知識と高いリサーチマインドを有し、優れた教育・研究者を志す人材を求める。

AP1

自主創造の精神に基づき、独創的な研究ができる人。

AP2

研究者または教育者となる強い目的意識と高い倫理観をもつ人。

AP3

自己課題とさらなる探究心に挑戦する力を持ち続けて努力する人。

AP4

生涯にわたる探求意欲を持続し、国際的な視点から社会貢献したい人。

学位論文の審査基準について

歯学研究科における論文の審査については、歯学研究科のディプロマ・ポリシーに基づき、以下の基準により総合的に評価する。

- ① 研究の内容に独創性と新規性があること。
- ② 研究の目的・背景が明確に記述されていること。
- ③ 研究の計画・方法について明確かつ具体的に記載されていること。
- ④ 客観的な研究結果に基づき、論理的な考察が成されていること。
- ⑤ 適切に文献が引用されていること。
- ⑥ 研究倫理を遵守して行われた研究であること。
- ⑦ 学術的価値が認められる研究であること。

大学院歯学研究科について

歯学研究科長 飯 沼 利 光

昭和 31 年に創設された日本大学大学院歯学研究科は、私立歯科大学のなかでは最初に開設された大学院です。本研究科の創設には、日本大学歯学部の前身である東洋歯科医学校や日本大学専門部歯科・歯科医学校の卒業生の方々の大変なご支援とご苦労があったと、「日本大学歯学部百年史」に記されています。その最大の課題は大学院歯学研究科校舎の建設であり、創立者の佐藤運雄先生、当時の学部長の鈴木勝先生、同窓会長の深沢龍之介先生をはじめ多くの方々が、日本全国の同窓会支部に赴いて本研究科創設の支援を懇願し、それに応えた卒業生の愛校心によって建設が成就しました。本研究科をこれまでに修了して歯学博士又は博士（歯学）の学位を授与された方は 1,705 名となり、多くの方が社会において優秀な人材として活躍されております。

本研究科では、平成 17 年度から従来の歯科基礎系と歯科臨床系の 2 つの専攻区分を一本化し、歯学専攻としました。これは、近年の科学技術の発達・高度化とともに歯学の研究分野も幅広く多岐にわたるようになり、大学院学生が基礎・臨床にこだわらずに興味ある研究分野を自由に選択して意欲的に研究に取り組めるようにするためです。

医学の一分野として顎顔面口腔領域の研究を捉えた場合、再生医療、遺伝子治療、新素材による高度先端治療、画像転送による遠隔地診断など、新しい診療システムが展開されている現在、これらの診断、治療技術の研究、開発を高度なレベルで遂行するには、基礎系と臨床系の講座の枠を越えた複数指導体制の導入が望まれます。また、歯学全般がかかわる社会歯科学、口腔健康科学などの分野の重要性も増加する傾向にあります。大学院学生に対する研究指導体制がこのように強化され、本研究科の教育・研究理念をさらに明確化していくことで、より高度な研究成果が生まれるものと確信しております。さらに、大学院における教育・研究を力強く推し進めることにより、日本の研究レベルの向上と、産官学共同事業の発展が期待されます。将来の日本を担う創造性豊かな若い研究者、教育者の育成のみでなく、他分野の多様な研究、教育、職域などの幅広い場で中核的な人材として活躍する人材の育成も付託されています。

なお、本研究科では、地域医療の最前線で活躍されている先生方に対して、Evidence-based Dentistry (EBD) の確立と歯科医療スキルの向上を遂行させる目的で、平成 19 年度から社会人大学院入学制度を導入しました。現在の定員は社会人大学院も含めて 30 名です。この制度は、専門分野のみならず、学際領域の研究を推進して先端的歯科治療に取り組み、国民の健康増進と QOL の向上を目標として導入されました。研究の高度化を図ろうとする幅広い分野の多くの方々の応募により、本研究科が益々活性化することを願っております。

1. 歯学研究科の沿革と現況

日本大学大学院歯学研究科は、歯科医学の研究活動に必要な高度の研究能力及びその基盤となる豊かな学識とともに、歯科医学の学術発展に寄与しうる研究を指導する能力を養うことを目的とし、昭和31年度に「歯科基礎系」と「歯科臨床系」の2専攻で発足した。しかしながら、近年の社会情勢の変化や学問の高等化に組織改組を検討する必要性が生じ、平成17年度から2専攻を「歯学専攻」の1専攻に統一し、その中に基礎系と臨床系が共同研究を推進しうる新たな枠組の3つの分野（口腔構造機能学分野、応用口腔科学分野、口腔健康科学分野）を配置した。

歯科医学教育改革に伴い、平成18年度から歯科医師の初期研修としてプライマリー・ケアのレベル向上を教育目標とした歯科臨床研修制度が確立された。臨床研修に求められているのは、事実に基づいた歯科医療（Evidence Based Dentistry: EBD）であり、この科学的に根拠のある事実から診断や治療方針を決定していくことが必要とされている。昨今のEBD意識の高まりによって、臨床に携わっている歯科医師自身に広く臨床研究に参加する道を開放していく必要性が生じている。また、継続した高度専門知識への探求心を啓発していくことが肝要である。そこで、社会人として働きながら大学院に学び、臨床研究を進めていくスキルを向上させることが重要となることから本研究科では、*大学院設置基準第14条による教育方法の特例を実施して、平成19年度から従来的一般入試に加え、社会人入試を行うこととした。

また、令和2年度の学位審査から、インパクトファクター（IF）を有する国際水準の専門誌等に筆頭著者として掲載されている原著論文を基幹とし、学位論文を提出する場合、学位請求に必要な原著論文数を1編以上とした。

なお、優れた研究を行った者には、選考の上、本学部独自の佐藤研究奨学金が給付され、海外学会での研究発表や日本大学大学院海外派遣奨学生として海外留学の機会が与えられている。

現在までに歯学研究科において学位（博士）を取得した者は1,705名である。

*参考：大学院設置基準第14条（昭和49年文部省令第28号抜粋）

第14条 大学院の課程においては、教育上特別の必要があると認められる場合には、夜間その他特定の時間又は時期において授業又は研究指導を行う等の適当な方法により教育を行う事ができる。

2. 歯学研究科の在籍者数, 令和9年度募集人員及び学費

分野	構成科目	在籍者数(令和8年度)				令和9年度 (一般・社会人)募集人数
		1年	2年	3年	4年	
口腔構造機能学分野	解剖学					30 (1期・2期合わせて)
	生体組織学					
	口腔解剖学					
	口腔生理学			1	1	
	歯科薬理学	1		1		
	口腔外科学		5	3	5	
歯科矯正学	2	2	3	3		
歯科麻酔学		1	1	1		
応用口腔科学分野	口腔生化学		1			
	口腔病理学			2		
	歯科理工学	1				
	保存修復学	1	6	1	2	
	歯内療法学	3	1	1	2	
	歯周病学	1		3	4	
	総義歯補綴学	1	1	2		
	局所床義歯学	1		1	1	
クラウン・ブリッジ学	1	2	2	3		
口腔健康科学分野	感染症免疫学			1		
	口腔衛生学			1	1	
	歯科法医学		1	2		
	歯科放射線学		1		1	
	小児歯科学	1			2	
	口腔内科学	1				
	摂食機能療法学		3		1	
合計	14	24	25	27		

学 費

区分	1年次		2～4年次		
	入学手続時納入金(前学期分)		後学期納入金	前学期納入金	後学期納入金
	学内者	学外者			
入学金	—	200,000円	—	—	—
授業料	400,000円	400,000円	400,000円	400,000円	400,000円
施設設備資金	—	400,000円	—	—	—
校友会費(準会員)	10,000円	10,000円	—	10,000円	—
合計	410,000円	1,010,000円	400,000円	410,000円	400,000円

[備考]

* 修了予定年次の後学期に校友会正会員会費を10,000円納入。

* 学内者…本大学を卒業した者または本大学大学院を修了した者。

3. 歯学研究科の構成

専攻	分野	所属講座名
歯 学 専 攻	口腔構造機能学分野	解剖学 I 解剖学 II 生理学 薬理学 口腔外科学 I 口腔外科学 II 歯科矯正学 麻酔・全身管理学
	応用口腔科学分野	生化学 病理学 歯科理工学 歯科保存学 I 歯科保存学 II 歯科保存学 III 歯科補綴学 I 歯科補綴学 II 歯科補綴学 III
	口腔健康科学分野	感染症免疫学 衛生学 法医学 歯科放射線学 小児歯科学 口腔内科学 摂食機能療法学

口腔構造機能学分野

Oral Structural and Functional Biology

解剖学，生理学，薬理学，口腔外科学，歯科矯正学，歯科麻酔学をもって構成される。

解剖学においては骨，軟骨，歯の初期発生および細胞分化の機構，成長因子の遺伝子発現，組織工学，細胞生物学に関する研究を行う。生理学は三叉神経に関連する痛覚受容，加齢現象と痛覚の関係等について考究する。薬理学ではオーラルディスクネジア，顎運動に関係する大脳基底核および味覚・痛覚に関与する大脳皮質の神経科学，薬理学的研究を担当する。口腔外科学は腫瘍，嚢胞，硬組織の石灰化，自己免疫疾患の病態および治療法，再建外科，骨補填材料，遺伝子工学などを研究する。歯科矯正学は外力に対する歯周組織の応答，レーザーが骨組織に与える影響，インプラントを固定源とする矯正処置などについて研究する。歯科麻酔学は麻酔薬の体内動態，周術期における循環，代謝管理などを研究対象とする。

顎顔面口腔領域を中心に，当該分野の構造，機能，外科的侵襲，全身管理，歯列，咬合の矯正などについて，専門分野のみならず，境界領域の研究をも推進することが可能になる。

大学院担当教員一覧

分野	構成科目	教授	准教授	専任講師	助教
口腔構造機能学分野	解剖学	○高橋 富久	◇二宮 禎 ◇藤原 恭子	◇大橋 晶子	
	発生・組織学 口腔解剖学		◇山崎 洋介	◇湯口 眞紀	今岡 紗耶
	口腔生理学 生理学	○篠田 雅路	◇林 良憲 ◇人見 涼露	◇坪井 美行	
	歯科薬理学 薬理学	○小林 真之		◇山本 清文 ◇中谷 有香	
	口腔外科学	○丸岡 豊 ○日野 峻輔	◇篠塚 啓二	◇佐藤 貴子 田中 孝佳 ◇白土 博司	草野 明美 ◇長崎 真希 小林秀太郎 ◇古川 明彦 ◇玉川 崇皓 ◇小山 亮 髭内 美穂
	歯科矯正学	○納村 泰弘	◇中嶋 昭 ◇馬谷原琴枝	◇内田 靖紀 ◇稲葉 瑞樹	有間 英智 チャールズ・コードゥ
歯科麻酔学	○一杉 岳	◇小柳 裕子		◇金子 啓介 梶原 美絵 横田 英子 栗栖 諒子	

○印：研究指導教員 (Ⓞ)，◇印：科目担当教員 (合)，無印：研究指導アドバイザー

(令和8年5月1日現在)

解剖学

〔主な研究テーマ〕

- ・骨欠損修復の分子メカニズム
- ・軟骨細胞を用いた骨欠損治療の開発
- ・間葉系幹細胞の分化と転写因子の関係
- ・歯周組織の再生における骨芽細胞と破骨細胞のクロストーク
- ・歯の矯正移動における分子メカニズム

〔研究内容〕

再生医療への応用を目標として、歯周組織および骨組織を対象に組織修復と間葉系幹細胞の分化メカニズムに焦点を当てた基礎研究を行う。具体的には、(1) 損傷を受けた際に活動する細胞を同定し、損傷修復との関係を検討することで細胞分化に関与するシグナルを解明する。また、遺伝子改変マウスを使用して、損傷治癒における標的分子とシグナル分子の機能について検討する。(2) 間葉系細胞への遺伝子導入や薬剤投与によって、細胞老化や寿命を制御する分子の細胞分化に及ぼす影響を調べる。(3) 炎症時に一酸化窒素合成酵素と共に誘導される生理活性物質が、骨吸収を制御する標的因子として機能するか検討する。そのために、生理活性物質による破骨細胞分化に与える影響を調べ、そのメカニズムを解明する。(4) 歯の矯正移動に働く分子メカニズムを解明するために、血管内皮細胞増殖因子と骨免疫機能の関係を検討する。これらの研究を通じて、歯周組織や骨代謝に関わる細胞の機能的・形態学的な変化やその生物学的意義を探究する。

当講座の特色として、研究課題の円滑な推進のため、講座員全員が親身になって考え、協力し合える研究環境の構築に努めている。

〔最近の主な研究業績〕

1. The novel function of tetrahydrobiopterin on osteoclast formation of RAW264.7 cells through NF κ B pathway. *J Hard Tissue Biol*, in press.
2. LRP1-deficient leptin receptor-positive cells in periodontal ligament tissue reduce alveolar bone mass by inhibiting bone formation. *Arch Oral Biol*, 158, 105853, 2024.
3. Knockdown of TFAP2E results in rapid G2/M transition in oral squamous cell carcinoma cells. *Oncol Lett*, 27, 128, 2024.
4. p53 deficiency promotes bone regeneration by functional regulation of mesenchymal stromal cells and osteoblasts. *J Bone Miner Metab*, 40, 434-447, 2022.
5. Chemokine ligand 28 (CCL28) negatively regulates trabecular bone mass by suppressing osteoblast and osteoclast activities. *J Bone Miner Metab* 39, 558-571, 2021.
6. Exosomal miR-214-3p as a potential novel biomarker for rhabdoid tumor of the kidney. *Pediatr Surg Int* 37, 1783-1790, 2021.
7. Knockdown of E2F5 induces cell death via the TP53-dependent pathway in breast cancer cells carrying wild-type TP53. *Oncol Rep* 44, 2241-2252, 2020.
8. Polyethylene glycol derivative 9bw suppresses growth of neuroblastoma cells by inhibiting oxidative phosphorylation. *Cancer Sci* 111, 2943-2953, 2020.
9. Forced expression of mouse progerin attenuates the osteoblast differentiation interrupting β -catenin signal pathway in vitro. *Cell Tissue Res* 375, 655-664, 2019.
10. Intermittent parathyroid hormone 1-34 induces oxidation and deterioration of mineral and collagen quality in newly formed mandibular bone. *Sci Rep* 9, 8041, 2019.
11. CRISPR/Cas9-mediated in vivo gene editing reveals that neuronal 5-HT_{1A} receptors in the dorsal raphe nucleus contribute to body temperature regulation in mice. *Brain Res* 1719, 243-252, 2019.
12. Molecular alterations of newly formed mandibular bone caused by zoledronate. *Int J Oral Maxillofac Surg*, 47, 1206-1213, 2018.
13. Organic anion transporters, OAT1 and OAT3, are crucial biopterin transporters involved in bodily distribution of tetrahydrobiopterin and exclusion of its excess. *Mol Cell Biochem* 435, 97-108, 2017.
14. Lamin A overexpression promotes osteoblast differentiation and calcification in the MC3T3-E1 preosteoblastic cell line. *Biochem Biophys Res Commun* 488, 664-670, 2017.
15. Tetrahydrobiopterin activates brown adipose tissue and regulates systemic energy metabolism. *JCI Insight* 2, e91981, 2017.

発生・組織学, 口腔解剖学

〔主な研究テーマ〕

・歯の線維性支持組織の比較組織学

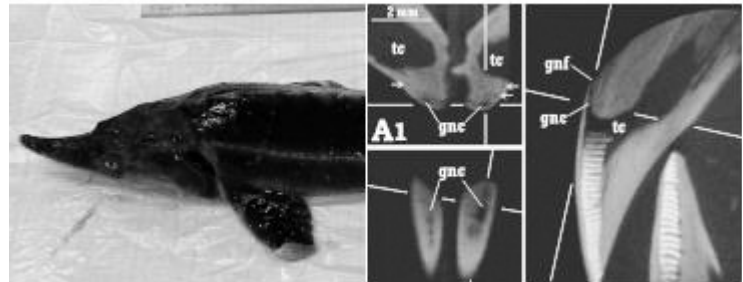
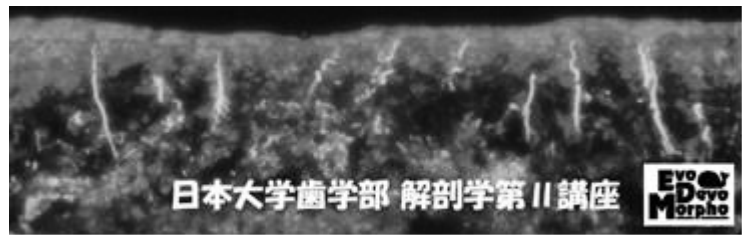
哺乳類における歯の支持（釘植 gomphosis）を構成する歯根膜線維系の系譜を探るため、魚類顎歯の支持に関わる線維の分布・走行や形態学的特徴を研究している。

・魚類の顎歯・咽頭歯の比較形態学

micro CT を用いた三次元的な解析によって、魚種の系統関係とそれらの顎歯及び咽頭歯の形態や歯の支持構造の多様性の関係解明に取り組んでいる。

・比較発生学による歯の発生研究

種々の脊椎動物において、歯の多様な形態形成に共通する基本ツールキットを探索し、その遺伝子発現と形態の関連性を明らかにし、臓器としての歯の本質の理解に迫る。



〔上〕講座ウェブページに掲載のバナー（発生中の皮下における fibrillin microfibril の特徴的配列）、〔左〕チョウザメ（Bester；オオチョウザメとコチョウザメのハイブリッド）体長 78cm 個体の頭部側面、〔右〕トラフグの上下顎嘴状歯で見いだされた歯導管

〔研究内容〕

発生は進化の履歴を刻み、脊椎動物の多様な歯の形態は、4億5千万年にわたる進化のたまものである。また、組織・臓器の再生では進化や発生のプロセスが再現される。進化と発生は一貫した基本原理の上に成り立っている現象である。その実行者は細胞、そして、細胞は自らが創り出した細胞外マトリックスの中でそれを利用し、また逆に、マトリックスから制御や拘束を受ける。当研究室では、進化及び発生において第一義的な表現型である「形態」に注目し、これを基盤とする研究を展開している。どのようにして「かたち」が創り出されるのか、また、その変化は何によって惹起され、何を意味するのかといった疑問を解くために、ミクロのレベルでの形態所見や分子細胞生物学的な解析法を駆使して研究を進めている。

〔最近の主な研究業績〕

1. Structural truncation of IL-1R2 enhances the anti-inflammatory activity of HeLa cells. *Cell Struct Funct* 51, 1-9, 2026.
2. Design and fabrication of customized brain slice matrices using CAD and 3D printing technology. *PLOS ONE* 20, e0317616-e0317616. 2025.
3. Tomographic and 3-dimensional imaging of the larger recurved caniniform teeth on the jawbone of *Caprodon schlegelii*. *J Oral Sci* 67, 46-52. 2025.
4. Skeletal muscle activity affects the deformity of long bone morphology in lathyrict chick embryo. *Anat Rec* 308, 1480-1491, 2025.
5. The N-terminal domain of precursor IL-1 α enhances IL-6 expression via an intracrine mechanism in oral squamous cell carcinoma. *Mol Biol Rep*, 53, 33. 2025.
6. 魚類下顎歯における歯一骨のジオメトリーと線維性支持について. *日大歯学* 97, 60-67. 2023.
7. Oral and palatal dentition of axolotl arises from a common tooth-competent zone along the ecto-endodermal boundary. *Front Cell Dev Biol* 8, 622308, 2021.

口腔生理学, 生理学

〔主な研究テーマ〕

- ・ 三叉神経障害性疼痛の発症機構に関する研究
- ・ 顎顔面領域の異所性疼痛発症機構に関する研究
- ・ 口腔癌の癌性疼痛発症機構に関する研究
- ・ 精神的ストレスによる口腔顔面痛機構に関する研究
- ・ 遅発性筋痛発症機構に関する研究

〔研究内容〕

“痛み”は生体にとってなくてはならない感覚であるが、神経損傷や腫瘍など、様々な原因により難治性の異常な痛みを引き起こすことがある。当講座では、この異常な痛みの末梢および中枢神経系における発症機構の解明を目的に様々な研究手法を用いて網羅的に解析し、さらに得られた研究成果を臨床へ応用することを目指している。

詳しくは Web site: <http://www2.dent.nihon-u.ac.jp/g.physiology/> をご覧ください。

また当講座の特色として、大学院生をはじめとする若い研究者に対し、研究成果を国内外の学会で発表する機会を与えている。特に大学院生に対しては、在学中に少なくとも1度以上、国際学会に参加するチャンスがあり、また国内外の様々な大学や研究機関への留学も可能である。さらに、得られた研究成果を海外の一流学術雑誌に筆頭著者として発表できるように指導している。

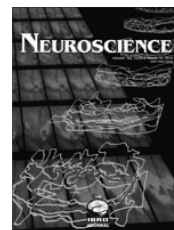
〔最近の主な研究業績〕

1. Legumain-mediated activation of PAR2 contributes to mechanical hypersensitivity in a rat model of tongue cancer. *Oral Dis*, 2026, in press.
2. Trigeminal ganglion-trigeminal spinal subnucleus oralis pathway contributes to orofacial neuropathic pain. *Pain.*, 2026, in press.
3. Effects of ovariectomy of rat on tongue neuropathy: relevance to burning mouth syndrome. *J Dent Sci*. 21(1): 177-183, 2026.
4. Purinergic receptor- and metabotropic glutamate receptor 5-mediated interactions between satellite glial cells and neurons in rat trigeminal ganglia. *Glia*. 74(2): e70126, 2026.
5. Trigeminal ganglion interferon- γ signaling drives orofacial neuropathic pain in rats. *J Headache Pain*. 27(1): 18, 2025.
6. P2Y12 Signaling in Muscle Satellite Cells Contributes to Masseter Muscle Contraction-induced Pain. *J Pain*. 30: 105360, 2025.
7. Matrix metalloproteinase 9 expressed in satellite glial cells in the trigeminal ganglion contributes to tongue-cancer-associated pain. *J Oral Biosci*. 67(4): 100709, 2025.

歯科薬理学, 薬理学

〔主な研究テーマ〕

- ・神経損傷によって生じる異常疼痛のメカニズム解明
- ・顎顔面口腔領域における感覚制御機構の解明



〔研究内容〕

当講座は、様々な疾患によって障害された顎顔面口腔に関わる感覚機能を取り戻すために必要な基礎医学研究を行うと同時に、臨床応用に向けた研究を積極的に推進している。

- ・歯科医療において遭遇する異常疼痛は、難治性であり未だに決定的な治療法は確立されていない。当講座では、中枢神経系における異常疼痛のメカニズムについてパッチクランプ法から2光子励起顕微鏡によるカルシウムイメージング、膜電位感受性色素を用いた光学計測など階層縦断的に研究手法を用いて研究を行っている。これらの手法に加えてウイルスベクターや遺伝子改変動物を用いることによって特定の標的細胞を操作する手法を積極的に導入している。これらの研究手法を利用することによって、異常疼痛の発症を予防する手法の開発を進めている。
- ・味覚は食育の中で重要な位置を占めている。しかし、その中枢神経系における可塑的变化はほとんど不明のままである。我々は、大脳皮質における味覚の情報処理機構について基礎的研究を行っている。
- ・脳研究の根源的な課題である“心”や“意識”が生じるしくみを全身麻酔薬による脳局所神経回路への影響を研究することで解明しようとしている。

当講座では、本大学院の生理学講座のほか大阪大学、兵庫医科大学、福島県立医科大学、同志社大学など外部研究機関と精力的に共同研究プロジェクトを進めている。詳細は講座ホームページ (<http://www2.dent.nihon-u.ac.jp/pharmacology/>) を参照。

〔最近の主な研究業績〕

1. Descending projections from the insular cortex to the lateral parabrachial nucleus facilitate nociceptive behaviors in rats. *PAIN*, 166, 2738-2755, 2025.
2. Regulation of nociception by LTP of IPSCs from insular cortical parvalbumin-immunopositive neurons to pyramidal neurons. *PAIN*, 166, 1823-1835, 2025.
3. Opioidergic activation of the descending pain inhibitory system underlies placebo analgesia. *Scientific Advances*, 11, eadp8494, 2025.
4. Neuronal subtype-dependent kinetics of EPSCs induced by thalamocortical projections from the ventroposteromedial thalamic nucleus to the insular cortex in rats. *Pflügers Archiv*, 477, 707-717, 2025.
5. Cortical nitric oxide required for presynaptic long-term potentiation in the insular cortex. *Philos Trans R Soc Lond B Biol Sci*, 379, 20230475, 2024.
6. P2X receptor- and postsynaptic NMDA receptor-mediated long-lasting facilitation of inhibitory synapses in the rat insular cortex. *Neuropharmacology* 245, 109817, 2024.
7. Activation of multiple neuromodulatory systems in alert rats acquiring conditioned taste aversion revealed by positron emission tomography. *Brain Res* 1822, 148617, 2024.
8. Insulin potentiates inhibitory synaptic currents between fast-spiking and pyramidal neurons in the rat insular cortex. *Neuropharmacology* 238, 109649, 2023.
9. Descending projections from the insular cortex to the trigeminal spinal subnucleus caudalis facilitate excitatory outputs to the parabrachial nucleus in rats. *PAIN* 164, e157-e173, 2023.

口腔外科学

〔主な研究テーマ〕

- ・再生医療技術を基盤とした顎顔面骨・軟骨再建の基礎および応用研究
- ・CT・数値流体解析等を用いた顎顔面形態と口腔機能・呼吸機能の関連解析
- ・口腔癌および難治性疼痛の分子機構の解明と新規治療法の開発
- ・顎顔面外科手術を応用した睡眠外科治療と上気道機能評価
- ・口腔内細菌叢（マイクロバイオーム）と全身疾患との関連解明
- ・骨代謝・免疫・微小循環に着目した顎骨疾患（MRONJ等）の病態解明
- ・顎関節疾患（進行性下顎頭吸収）の発症機構の解明

〔研究内容〕

- ・顎顔面領域における形態・機能・分子生物学的変化を統合的に解析し、臨床応用へとつなげる研究を推進している。
- ・再生医療分野では、人工骨、骨・軟骨・骨膜などを組み合わせた複合的再生技術により、顔面再建に応用可能な新規移植骨の開発を目指している。骨形成過程における遺伝子発現や蛋白発現の変化を分子レベルで解析し、micro-CTを用いた形態評価と組み合わせることで、効率的な骨再生手法の確立を図っている。
- ・さらに、移植材を用いない骨形成機構や微小環境に着目し、血餅や骨微小空間の時空間的動態解析を基盤とした骨再生機構の解明を進めている。
- ・顎顔面機能解析では、CT画像や三次元シミュレーション、数値流体力学（CFD）解析を用い、顎矯正手術前後における上気道形態および気流動態の変化を評価している。これにより、睡眠時無呼吸障害の病態解明および最適な顎骨移動量・方向の決定に資する指標の確立を目指している。また、閉塞性睡眠時無呼吸に対する外科的治療の効果を、生理学的指標（上気道抵抗、睡眠状態）を含めて評価し、診断・治療戦略の高度化を図っている。
- ・腫瘍・疼痛研究では、口腔癌に伴う難治性疼痛の発症機構に着目し、三叉神経系におけるグリア細胞およびATPシグナル伝達を介した疼痛調節機構の解明を進め、新規鎮痛戦略の開発を目指している。
- ・さらに、顎骨壊死（MRONJ）に対しては、口腔マイクロバイオーム解析を基盤とし、感染・免疫・骨代謝の相互作用を明らかにすることで、発症予防および新規治療法の開発を目的とした研究を展開している。
- ・顎関節領域では、進行性下顎頭吸収の好発年齢が二峰性を示す機序に着目し、免疫細胞インデックス解析を用いて病態解明を試みている。
- ・また、咀嚼筋腱・腱膜過形成症（MMTAH）においては、エクソソームを介した筋—骨格間クロストークに注目し、新たな骨形成機構の解明と診断・治療法の確立を目指している。
- ・口腔内細菌と全身疾患の関連については、誤嚥性肺炎のみならず慢性呼吸器疾患との関係に着目し、細菌由来因子が呼吸器上皮に及ぼす影響を分子レベルで解析している。
- ・さらに、低侵襲レーザーを用いた血管腫治療や、骨微小循環の制御を介した新規治療戦略の開発など、臨床応用を志向した研究も展開している。

〔最近の主な研究業績〕

1. Chemokine receptor 5 signaling in oral diseases and degenerative temporomandibular joint disease. *J Oral Biosci* 67, 100666, 2025.
2. Influence of maxillofacial skeletal morphology on difficult laryngoscopy. *BMC Anesthesiol*, 25, 147, 2025.
3. Shotgun metagenomic analysis of saliva microbiome suggests *Mogibacterium* as a factor associated with chronic bacterial osteomyelitis. *PLoS One* 19, e0302569, 2024.
4. Assessing the efficacy of target adaptive sampling long-read sequencing through hereditary cancer patient genomes. *Npj Genom Med* 9, 11, 2024.
5. Association between an increased serum CCL5 level and pathophysiology of degenerative joint disease in the temporomandibular joint in females. *Int J Mol Sci* 24(3): 2775, 2023.
6. Role of macrophage colony-stimulating factor for Staphylococcal infection in the oral cavity. *J Clin Med* 12(18): 5825, 2023.
7. Exploring the genetic diversity of the Japanese population: Insights from a large-scale whole genome sequencing analysis. *PLoS Genet* 19(12): e1010625, 2023.
8. What does oral care mean to society? *BioScience Trends* 16(1): 7-19, 2022.

歯科矯正学

〔主な研究テーマ〕

- ・矯正治療中に歯顎顔面にかかる矯正力および顎整形力に関する生体力学的検討
- ・低出力超音波（LIPUS）の矯正歯科治療への応用
- ・アンカースクリューを固定源とした新しい矯正治療法の開発
- ・ブラケット撤去容易な矯正用レジンの開発と臨床応用

〔研究内容〕

歯科矯正治療は、不正咬合患者自身の顎や歯を再構築し、口腔や顔面の正常な機能、形態や審美性を回復する治療である。しかし、冗長な治療期間、咬合痛、歯肉退縮や歯根吸収などのデメリットもある。医学の著しい発展に伴い、歯科矯正学の研究範囲も拡大しており、当講座では上記のテーマに基づき下記のような研究を進めている。

当講座では歯顎顔面にかかる矯正力および顎整形力に関する生体力学的検討を積極的に行っていく予定である。現在、CT から得た DICOM データから自動的にシミュレーションモデルを構築するアルゴリズムの作成を試みており、臨床への応用を見据えた検討を行っている。

また、当講座での研究成果により、低出力超音波パルス（LIPUS）に外傷歯の骨性癒着抑制効果があることが明らかとなった。このメカニズムの解明を目的として、結合組織増殖因子（CTGF）とヒートショックプロテイン（HSP）を用いて組織再生に重要な分子の発現に対する影響、および LIPUS のシグナル伝達機構を検討し、LIPUS による歯の骨性癒着抑制効果に対する CTGF および HSP の関与を検討することを計画している。また、当講座では LIPUS に神経再生効果があることを発見した。下顎骨骨切り術の併用を必要とする外科的矯正治療の偶発症として下歯槽神経損傷を生じることがあるが、このような症例への LIPUS の臨床応用に向けた検討を行っている。

一方、臨床では矯正用アンカースクリューを固定源として用いることで、患者負担の少ない矯正治療を発展させている。スクリュー安定性について、有限要素法、動物実験や CT 画像等の臨床データを用いて検討し、最適な植立条件を見出し良好な治療結果を得ている。また矯正治療後、ブラケット撤去時の疼痛を軽減するため、ブラケットを容易に撤去できる新しい接着用レジンの開発と使用についても検討している。

〔最近の主な研究業績〕

1. Novel function of tetrahydrobiopterin in osteoclast formation in RAW264.7 cells via the NFkB pathway. *J Hard Tissue Biol.* (In press) 2026.
2. Effect of atmospheric pressure plasma irradiation on adhesive penetration into gaps. *Dent Mater J* 45, 214-219, 2026.
3. The cortical areas processing periodontal ligament nociception in mice. *J Oral Biosci* 67(1), 100597. 2025.
4. Relationships between periodontal biotype and anatomical bone features of placement sites for orthodontic anchoring screw: a cross-sectional study. *Clin Oral Investig.* 29(2): 124. 2025.
5. Changes in enamel hardness, wear resistance, surface texture, and surface crystal structure with glass ionomer cement containing BioUnion fillers. *Dent Mater J* 43(2): 247-254. 2024.
6. LRPI-deficient leptin receptor-positive cells in periodontal ligament tissue reduce alveolar bone mass by inhibiting bone formation. *Arch Oral Biol* 158, 105853, 2024.
7. Optimal Insertion Torque for Orthodontic Anchoring Screw Placement: A Comprehensive Review. *Appl Sci* 13 ,10681, 2023.

歯科麻酔学

〔主な研究テーマ〕

- ・麻酔薬による意識消失のメカニズムの解明
- ・上位中枢における麻薬性鎮痛薬の作用メカニズムの解明
- ・歯科領域に特化した医療安全および救命処置に関わる研究

〔研究内容〕

- ・麻酔薬による意識消失のメカニズムの解明

静脈麻酔薬プロポフォールは、GABA_A受容体に作用し抑制性シナプス伝達を増強することで、大脳皮質ニューロンに対し抑制的に働くことが示されている。我々はこれまでに、プロポフォールによる抑制性シナプス伝達の増強は大脳皮質ニューロンの種類により異なることを示してきた。しかし、その結果としてどのように意識消失が引き起こされるかについてはいまだ解明されていない。我々は、電気生理学的手法を用いて、種々の大脳皮質ニューロンで構成されている局所神経回路に対するプロポフォールの作用について、薬理学講座と共同研究を行っている。

- ・上位中枢における麻薬性鎮痛薬の作用メカニズムの解明

麻薬性鎮痛薬は、歯科口腔外科領域の全身麻酔になくてはならない鎮痛薬であり、その作用機序として脊髄をはじめとした下位中枢での研究が進んでいる。その一方で、精神依存などの副作用、および痛みの下行性抑制に寄与する上位中枢での研究は遅れをとっている。我々は、電気生理学的手法を用いて、大脳皮質をはじめとした上位中枢における麻薬性鎮痛薬のシナプス伝達修飾作用について、薬理学講座と共同研究を行っている。

- ・歯科領域に特化した医療安全および救命処置に関わる研究

高齢社会に伴い歯科医療安全の必要性はより高まっている。しかし、歯科医師にとって必要な歯科診療中に発症する重症偶発症に対する適切な指針や救命処置が小児領域を含め不十分である。我々は、歯科治療中の心停止や小児歯科治療における局所麻酔薬の最大推奨用量なども含め、包括的な歯科救命処置ガイドラインの確立を目指し検討を進めている。

〔最近の主な研究業績〕

1. Effect of dental chair stabilization method on manual chest compressions. *Signa Vitae* 21, 60-67, 2025.
2. Influence of maxillofacial skeletal morphology on difficult laryngoscopy. *BMC Anesthesiol* 25, 147, 2025.
3. Effects of propofol on the formation and activity of osteoclast-like cells. *J Hard Tissue Biol* 33, 155-164, 2024.
4. Targeted therapy improves cellular dysfunction, ataxia, and seizure susceptibility in a model of a progressive myoclonus epilepsy. *Cell Rep Med* 5, 101389, 2024.
5. The influence of electrocardiogram (ECG) filters on the heights of R and T waves in children. *Sci Rep* 12, 13279, 2022.
6. Developmentally regulated impairment of parvalbumin interneuron synaptic transmission in an experimental model of Dravet syndrome. *Cell Rep* 38, 110580, 2022.
7. Inhibition of *Decl* provides biological insights into periodontal pyroptosis. *All Life* 14, 300-307, 2021.
8. Continuous administration of propofol suppresses osteoclast differentiation of RAW264.7 cells. *J Hard Tissue Biol* 30, 107-114, 2021.
9. Fast-spiking interneurons contribute to propofol-induced facilitation of firing synchrony in pyramidal neurons of the rat insular cortex. *Anesthesiology* 134, 219-233, 2021.

応用口腔科学分野

Applied Oral Sciences

生化学，病理学，歯科理工学，歯科保存学，歯科補綴学で構成される。

生化学は硬組織および歯周組織の再生を目的とした分子生物学的研究を行う。病理学は免疫グロブリンの構造と機能の解析を中心に分子生物学的研究を行い，各種病変の診断と治療への応用を試みる。歯科理工学は生体に使用される材料およびその製作過程で用いられる器材の開発，評価，生体と材料の界面の解析と親和性などに関する研究を担当する。歯科保存学は歯を可及的に保存する立場から，修復についての材料，器械，技法を，歯内療法では歯髄組織の恒常性や超音波診断を，歯周治療に関しては歯周病の発症機構，組織再生誘導法などを研究する。歯科補綴学は歯が失われた症例での欠損補綴が対象であり，高齢者を主体とした無歯顎患者の補綴処置に関連する基礎的研究，顎機能障害，唾液関連，磁性材料を応用した顎顔面補綴，スポーツ歯学，歯科インプラント，接着歯学，歯冠色修復などを研究する。

この分野は病態の分子レベルでの解析を基盤として，これを歯科疾患の治療に展開することを目指している。基礎，臨床の融合により，先端的歯科治療に寄与できる研究体制の構築を図る。

大学院担当教員一覧

分野	構成科目	教授	准教授	専任講師	助教
応用口腔科学分野	口腔生化学 生化学	○鈴木 直人	◇田邊奈津子 ◇津田 啓方		
	口腔病理学 病理学		◇山本安希子	◇福井 怜	◇角田麻里子
	歯科理工学	○小泉 寛恭		◇平場 晴斗	◇竹鼻 康輔
	保存修復学	○高見澤俊樹	◇陸田 明智		◇石井 亮翔 ◇柴崎 駿一 ◇須田 大内 元 笠原 悠太
	歯内療法学	○武市 収誠 ◇林	◇清水 康平	◇勝呂 尚	◇鈴木 裕介 ◇安川 拓也 ◇大原 絹代
	歯周病学	○佐藤 秀一	◇菅野 直之 ◇高山 忠裕 ◇蓮池 聡	◇間中総一郎	◇酒井 嶺典久 ◇渡辺
	総義歯補綴学	○飯沼 利光	◇池田 貴之	◇李 淳 伊藤 智加 ◇浦田健太郎 ◇西尾 健介	岡田 真治
	局部床義歯学	○飯田 崇	◇大山 哲生	◇秋田 大輔	伊藤 顕治 井上 陣 加藤 勲 眞田淳太郎
	クラウン・ブリッジ学	○小峰 太		◇本田 順一 ◇岩崎 太郎	◇窪地 慶 伊藤 恵吾 小林 達朗 新井 聡美

○印：研究指導教員 (㊟)，◇印：科目担当教員 (合)，無印：研究指導アドバイザー
(令和8年5月1日現在)

口腔生化学, 生化学

〔主な研究テーマ〕

- ・硬組織形成細胞の分化機構の解明
- ・低出力超音波（LIPUS）の硬組織代謝への影響の解明
- ・終末糖化産物（AGEs）が歯肉上皮バリアに及ぼす影響の検討
- ・歯周組織に及ぼす酪酸の影響を探る細胞生物学的・分子生物学的アプローチ
- ・オートファジー，細胞死が関与する疾患の発症メカニズムの解明

〔研究内容〕

生化学および口腔生化学の分野の研究領域は、口腔領域の細胞・組織の代謝、歯周疾患の病態解明などを中心とするものが大部分である。これらの研究成果は、歯科基礎医学の発展に貢献するのみでなく、歯科臨床における“Evidence Based Medicine”にも寄与する重要な研究領域である。

歯周疾患の病態に関する研究は、歯周組織を構成する硬・軟組織やそれらを構成する細胞の炎症等に対する応答性を中心に細胞生物学的・分子生物学的アプローチによって膨大な知見が蓄積されつつある。一方、高齢社会を迎え、自分の歯で摂食することは、身体的健康のみならず精神的健康の増進に重要である。そのためには、歯を顎骨に維持・固定している歯槽骨の病態と再生をアンチエイジングの視点から検討することも必要である。そこで、「骨リモデリング機構」、「歯周疾患に伴う組織破壊の分子機構」および「歯周組織再生」といったテーマを中心に、単に病態の解明や組織の再生を考えるのではなく、病状の軽減や免疫反応の活性化、疾病の予防なども視野に入れながら、QOLの向上を目指した研究を行っている。

生化学・分子生物学分野の研究では、生体の発生・分化や疾患機構の解明とその治療法の開発など幅広い分野で「未知の世界に踏み込んで光明を見いだす喜び」を知ることができる。若いうちに研究生活の楽しさを是非とも味わって、生涯研修が必須である歯科医学への本格的参入に際して大いに役立ててもらいたいと考えている。

〔最近の主な研究業績〕

1. Advanced glycation end products promote PGE₂ production in Ca9-22 cells via RAGE/TLR4-mediated PKC-NF-κB pathway. Cells in press, 2026.
2. Dental plaque metabolites induce polymorphonuclear leukocyte death accompanying peptidyl arginine deiminase 4 and citrullinated protein release: potential contribution to rheumatoid arthritis pathogenesis. J Oral Biosci, in press, 2026.
3. Low-intensity pulsed ultrasound induced osteoblast differentiation mediated by PYK2-ERK2 signaling in MC3T3-E1 cells. J Hard Tissue Biol 33, 47-54. 2024.
4. Co-Stimulation of AGEs and LPS Induces Inflammatory Mediators through PLCγ1/JNK/NF-κB Pathway in MC3T3-E1 Cells. Cells 12, 1383, 2023.
5. Local administration of anti-hepatocyte growth factor-neutralizing antibody reverts naturally occurring periodontitis. J Oral Biosci 63, 245-252, 2021.
6. Glucose transporter 4 mediates LPS-induced IL-6 production in osteoblasts under high glucose conditions. J Oral Sci 62, 423-426, 2020.

口腔病理学, 病理学

〔主な研究テーマ〕

・IL-1 α とそのレセプターの機能に関する研究

〔研究内容〕

病理学講座では、基礎医学的研究および病理診断業務を行っている。前者については後述する通り、インターロイキン-1 α (IL-1 α) という代表的 alarmin 分子に着目した研究を行っている。一方、後者については、付属歯科病院の各診療科から提出される検体の病理診断業務を担当している。これには HE 標本による病理組織診断と、口腔癌検診などで重要性が認識されてきた口腔細胞診業務が含まれている。そこで当講座の大学院生には、基礎研究の遂行による学位申請と口腔病理組織診断および細胞診の基礎的知識の修得を義務づけている。また、より専門的知識の習得を希望する者に対しては、日本大学および埼玉医科大学医学部などでの研修を通じて、死体解剖資格、口腔病理専門医さらに細胞診専門歯科医の資格取得に向けての教育も行っている。このように、病理学は基礎医学的および臨床・社会医学的側面を併せ持ち、基礎と臨床を結びつける学問であるといえる。

【脳虚血再灌流とalarminに関する研究】

alarmin とは壊死細胞や障害を受けた細胞から放出される分子のことであり、自身の置かれた危機的な状況を周囲の細胞や組織に知らしめる機能を有している。本講座では代表的 alarmin である IL-1 α とそのレセプター分子に着目した研究を行っている。細胞内で前駆体として産生された precursor IL-1 α (pIL-1 α) は、酵素的に切断され、N 末端側の propeptide IL-1 α (ppIL-1 α) と、C 末端側の mature IL-1 α (mIL-1 α) に分断される。このうち ppIL-1 α の機能は不明な点が多い。一方、IL-1 α の受容体には、IL-1 receptor type I (IL-1R1) および type II があるが、両者ともに核に局在することから、未だ知られていない機能があるものと考えられ、その機能解明を目指して研究を行っている。

〔最近の主な研究業績〕

1. Structural truncation of IL-1R2 enhances the anti-inflammatory activity of HeLa cells. *Cell Struct Funct*, 51, 1-9, 2026.
2. IL-1 α promotes cancer cell migration and is a potential prognostic marker in oral squamous cell carcinoma. *Cancers* 17, 2781, 2025.
3. The N-terminal domain of precursor IL-1 α enhances IL-6 expression via an intracrine mechanism in oral squamous cell carcinoma. *Mol Biol Rep* 53, 33, 2025.
4. Analysis of the effects of importin α 1 on the nuclear translocation of IL-1 α in HeLa cells. *Sci Rep* 14, 1322, 2024.
5. Allograft inflammatory factor-1 released from the cerebral microglia affect several organs in the body. *J Mol Histol*, 54, 147-156, 2023.
6. Nuclear localization of propeptide IL-1 α in HeLa cells. *J Oral Sci*, 64, 151-155, 2022.
7. Acid-electrolyzed functional water-induces Interleukin-1 α release from Intracellular Storage Sites in Oral Squamous Cell Carcinoma. *Int J Med Sci* 18, 1746-1752, 2021.
8. JunB can enhance the transcription of IL-8 in oral squamous cell carcinoma. *J Cell Physiol* 236, 309-317, 2021.
9. Bone regeneration is enhanced by the combined use of acid-electrolyzed functional water with hydroxyapatite/collagen composite. *J Biomed Mater Res B Appl Biomater* 108, 1679-1686, 2020.

歯科理工学

〔主な研究テーマ〕

- ・ 生体用チタン合金・超弾性合金の特性と歯科応用
- ・ 歯科材料の接着に関わる新規機能性モノマーの開発と評価
- ・ 歯科用金属，セラミックスおよび高分子材料の接合と複合化
- ・ 歯科材料の力学的性質評価法

〔研究内容〕

歯科診療においては、適切な材料を、その性質を理解した上で正しく使用することが重要である。歯科理工学は、歯科医療の中で使用する様々な材料および機器について、その性質や構造、性能などを工学、化学、生物学および生体安全性の立場から研究する学問である。したがって、研究開発においては、材料・機器を取り扱うすべての歯科臨床系分野と結びついているばかりでなく、一般工業界とも密接な関係を持っている。

歯科理工学講座では多くの臨床系講座とも共同研究を行っており、これらの研究成果は、日本歯科理工学会だけでなく、補綴、保存、矯正、インプラント、技工などの領域の国内外の関連学会で報告してきている。また、歯学部を卒業した後も、常に最新の情報を正確に取り入れて診療を行うことは、非常に重要である。当講座では、将来これらの情報を分析・評価するために助けとなる知識や方法を修得し、広い臨床領域における研究テーマをフォローできるようなサポート体制を整えている。

〔最近の主な研究業績〕

1. Evaluation of torque moment in self-ligation lingual brackets. Dent Mater J 44, 78-85, 2025.
2. Shape reproducibility of retentive devices made of cast titanium. Dent Mater J 43, 835-841, 2024.
3. Changes in the surface texture of pre-polymerized acrylic resin pediatric crowns following acidulated phosphate fluoride application. Dent Mater J 43, 711-717, 2024.
4. Depth of cure, water absorption, and solubility of indirect composites polymerized by light-emitting diode laboratory units. Dent Mater J 43, 559-564, 2024.
5. Surveillance study on the application of titanium and its alloys to removable dental prostheses. Dent Mater J 42, 619-623, 2023.
6. Effects of methacryloyloxydecyl dihydrogen phosphate on bonding of tri-*n*-butylborane-initiated resin to human enamel. Dent Mater J 42, 478-484, 2023.
7. Effect of luting system with acidic primers on the durability of bonds with Ti-15Mo-5Zr-3Al titanium alloy and its component metals. Dent Mater J 42, 418-425, 2023.
8. Effect of multi-purpose primer on bonding of acrylic resin to cast titanium and gold alloy after airborne-particle abrasion. J Prosthodont Res 67, 150-156, 2023.
9. Bonding performance of a thiohydantoin-methacrylate monomer on noble metal alloys. Dent Mater J 41, 279-285, 2022.
10. Gloss and surface roughness of pre-polymerized composite materials designed for posterior CAD/CAM crown restorations corroded with acidulated phosphate fluoride application. Dent Mater J 41, 60-67, 2022.

保存修復学

〔主な研究テーマ〕

- ・光重合型修復材に関する研究
- ・歯質接着性に関する研究
- ・レジンセメントに関する研究
- ・歯質の再石灰化に関する研究
- ・光干渉断層装置の歯科領域への応用
- ・ホワイトニング剤に関する研究

〔研究内容〕

齲蝕を主とする硬組織疾患の治療を行うためには、使用する材料に関する知識および修復法を理解することが必要である。とくに、どのように優れた性質をもつ材料であっても、その使用法が適切でなければ術者、患者ともに満足する結果が得られない。当講座ではこのような観点から橋渡し研究の一環として、現在臨床で広く用いられている修復材について、その理工学的性質を解明し、より簡便で効果的な臨床手技の確立を目指している。

研究対象となる材料としては、臨床で使用される修復材および合着材などを網羅しており、その中でもとくに光重合型コンポジットレジンおよびガラスイオノマーセメントに関する研究は国内外から高い評価を得ている。すなわち、歯質接着性、色調、機械的性質、重合特性および耐久性などに関する研究である。

これらの修復材に関する研究を基に、臨床に導入されているCAD/CAMあるいはセラミックインレーなどの修復材とともに、レジンセメントなどの装着材についても、他の研究機関に先駆けて精力的に検討を加えている。とくに、歯質接着性材料に関しては、開発段階から研究に参加し、臨床応用に欠かせない基礎データを蓄積している。

以上のような修復材に関する基礎的研究に加えて、臨床系講座の特色として、修復システムの短期ないしは長期的経過観察を通して、それぞれのシステムの臨床的評価を継続的に行っている。また、ホワイトニングに関する研究に関しては、基礎的および臨床研究を精力的に行っている。

〔最近の主な研究業績〕

1. Fracture resistance of a short fiber-reinforced flowable resin composite compared with different types of flowable resin composites. *J Mech Behav Biomed Mater* 175, 107327, 2026.
2. Clinical study on whitening effects and tooth sensitivity of home-whitening agents containing 6% hydrogen peroxide. *Dent Mater J* 45, 47-54, 2026.
3. Universal adhesive application and curing mode affect shear bond strength and shear fatigue bond strength of self-adhesive resin luting cements to dentin. *Dent Mater*, 41, 1213-1221, 2025.
4. Long-term whitening stability in combined in-office and at-home whitening protocols: A randomized controlled clinical trial. *J Esthet Restor Dent* 37, 1681-1691, 2025.
5. Influence of in-office whitening on the color matching and surface characteristics of single-shade resin composites. *J Esthet Restor Dent* 37, 423-439, 2025.
6. Influence of air abrasion on the bonding performance of universal adhesives to bovine dentin. *Dent Mater J* 44, 579-588, 2025.
7. Influence of luting strategies on dentin bond performance of self-adhesive resin luting cement in combination with a universal adhesive. *Clin Oral Investig* 28, 478, 2024.

歯内療法学

〔主な研究テーマ〕

- ・難治性根尖性歯周炎の炎症メディエーターおよび創傷治癒に関する分子生物学的研究
- ・根尖性歯周炎におけるヘルペスウイルス感染とその再活性化に関する検討
- ・根管治療用材料としてのCPC (Calcium Phosphate Cement) の応用に関する研究
- ・試作根管充填用コンデンサーを用いた新規根管充填法に関する研究
- ・急性, 慢性, あるいは非歯原性歯痛のメカニズム解明に関する神経生理学的研究
- ・低出力レーザーを応用した骨再生療法に関する研究

〔研究内容〕

歯内療法学講座では、臨床に直結する研究を基本として研究活動を行っている。近年、歯内療法学は象牙質・歯髄複合体などの新しい概念が導入されるなど急速に発展しつつある。それらの変化に対応すべく、当講座では従来から積み重ねてきた臨床的研究に加えて、当該領域である歯髄炎および根尖性歯周組織疾患に関する免疫学的・分子生物学的研究を継続的に実施している。

基礎的研究としては、根尖性歯周炎の発症と遷延に関する研究やMTAおよびCPCなどの新規材料を用いた細胞の硬組織形成能に関する研究を行っている。また急性, 慢性, あるいは非歯原性歯痛のメカニズムを解析するなど、現代の医療のあり方として提唱されている「Evidence-Based Medicine (根拠に基づいた医療) の実践」を基盤とした科学的根拠に成りうる研究活動に取り組んでいる。

臨床的研究としては、周波数応答特性を応用した根尖歯周組織の客観的評価や低出力レーザーを用いた骨再生療法および歯質接着性根管充填材の臨床応用に関する研究を行っている。

また、大学院生が学位申請をする場合には総括論文方式で、impact factorを有する海外の学術雑誌に筆頭著者として掲載されるように指導している。

〔最近の主な研究業績〕

1. Development of novel root canal obturation techniques using prototype obturators in conjunction with a resin-based hybrid root seal (MetaSEAL) soft paste sealer. *Cureus* 17, e80009, 2025.
2. Reactivation of Epstein-Barr virus by n-butyric acid from *Pseudoramibacter alactolyticus* induces inflammatory cytokines in periapical granulomas. *J Oral Biosci* 67, 100569, 2025.
3. Mirogabalin as a therapeutic option for neuropathic pain emerging postendodontic treatment: an observational study. *J Endod* 51, 279-286, 2025.
4. Utility of biphasic calcium phosphate cement as a seal for root-end filling. *Dent Mater J* 42, 412-417, 2023.
5. Elevated Foxo3a and Fas-ligand expression in human periapical granulomas as a potential treatment target. *Oral Dis* 29, 1128-1136, 2023.
6. Role of S100A4 in the Pathogenesis of Human Periapical Granulomas. *In Vivo* 35, 2099-2106, 2021.
7. The use of micro-computed tomography to determine the accuracy of electronic working length with two apex locators. *J Oral Sci* 63, 167-169, 2021.
8. Efficacy of prototype endodontic obturators for novel root canal obturation techniques using a resin-based sealer in various powder-liquid ratios. *J Oral Sci* 63, 157-162, 2021.
9. Epstein-Barr virus reactivation by persistent apical periodontal pathogens. *Int Endod J* 53, 492-505, 2020.

歯周病学

〔主な研究テーマ〕

- ・歯周・インプラント治療に対する組織再生治療法の開発研究
- ・歯周病のリスク因子の研究
- ・新しい歯周病の診断と治療法の開発研究
- ・歯周病が生活習慣病に及ぼす影響についての研究
- ・その他（歯周治療へのレーザーなどの応用）

〔研究内容〕

歯周病学講座における研究テーマは上記のように多岐にわたっています。研究テーマを選択するうえでの基本姿勢は、研究成果を臨床にフィードバックすることをモットーにして、講座単独あるいは細菌学、解剖学、生化学、病理学、生理学、衛生学講座ならびに総合歯学研究所高度先端医療部門と共同で研究を精力的に行っています。

得られた成果は日本歯周病学会、日本歯科保存学会、日本大学歯学会、国際歯科研究会、米国歯周病学会、ユーロペリオなどの国内および国際学会で発表しています。そして、国内外の専門誌、とりわけ impact factor を有する海外学術雑誌に掲載されています。これまでの枠にとらわれない歯周病の基礎と臨床を融合する研究に参画し、歯周病学の新たな分野を切り開く、熱意のある大学院生を求めています。

〔最近の主な研究業績〕

1. Resorbable bilayer membrane made of L-lactide- ϵ -caprolactone in guided bone regeneration: an in vivo experimental study. *Int J Implant Dent* 10, 1, 2024.
2. Epstein-barr virus promotes the production of inflammatory cytokines in gingival fibroblasts and RANKL-induced osteoclast differentiation in RAW264.7 cells. *Int J Mol Sci* 23, 809, 2022.
3. Comparison of macro-and micro-porosity of a titanium mesh for guided bone regeneration : An *In Vivo* Experimental Study. *In Vivo* 36, 76-85, 2022.
4. Real-time assessment of guided bone regeneration in critical size mandibular bone defects in rats using collagen membranes with adjunct fibroblast growth factor-2. *J Dent Sci* 16, 1170-1181, 2021.
5. Methodological quality and risk-of-bias assessments in systematic reviews of treatments for peri-implantitis. *J Periodontal Res* 54, 374-387, 2019.
6. Influence of estrogen deficiency on guided bone augmentation: investigation of rat calvarial model and osteoblast-like MC3T3-E1 cells. *Eur J Oral Sci* 126, 206-213, 2018.
7. Peripheral glial cell line-derived neurotrophic factor facilitates the functional recovery of mechanical nociception following inferior alveolar nerve transection in rats. *J Oral Facial Pain Headache* 32, 229-237, 2018.
8. Melatonin enhances vertical bone augmentation in rat calvaria secluded spaces. *Med Oral Patol Oral Cir Bucal* 21, e122-126, 2016.
9. Nicotine-induced expression of low-density lipoprotein receptor in oral epithelial cells. *PLoS One* 16, e82563, 2013.
10. Relationship between salivary antioxidant capacity and phases of the menstrual cycle. *J Periodontal Res* 47, 593-598, 2012.

総義歯補綴学

〔主な研究テーマ〕

- ・顎口腔系における疼痛メカニズムの解明
- ・口腔機能の加齢に伴う変化の数値化
- ・加齢による口腔機能の変化が健康寿命に及ぼす影響
- ・全部床義歯へのデジタル技術応用に関する検討

〔研究内容〕

総義歯補綴学講座では、加齢が顎口腔系における疼痛メカニズムに及ぼす影響について、神経生理学的に解明する分野と、高齢者の加齢に伴う口腔機能の変化が全身状態に及ぼす影響、さらにこれに資する有床義歯の製作に関する分野での研究を主として進めている。

具体的なものとして、高齢者においては加齢に伴い、顎機能障害や不適合義歯の使用により発症した疼痛に関し、加療により病態が看過したにもかかわらず、痛みの継続や不定愁訴を訴える患者が近年増加している。そのため、この発症メカニズムの解明と予防策の確立が求められている。当講座ではこのメカニズム解明のため老化マウスを用い、脳における神経伝達機構の加齢による変化を解析し検討している。

また、高齢者を対象とした研究では、高齢者の種々の口腔機能の変化が全身状態や精神状態に及ぼす影響を数値化することで、高齢者歯科医療の重要性に関するエビデンスの確立を目指している。

一方、有床義歯に関する臨床的研究として、軟質義歯安定剤使用が咀嚼機能に及ぼす影響について研究しており、口腔機能の改善や食生活の改善が、高齢世代の健康寿命の延伸に貢献するエビデンスの獲得を目指している。

このように、当講座は臨床講座であることから、研究の主体を臨床の場で社会に還元できる内容とすることを第一としている。そのため、得られた研究成果は国内外の専門学会にて広く社会に向け発信すると同時に、付属歯科病院での臨床にも反映させている。

〔最近の主な研究業績〕

1. Ageing-Related Macrophage Polarisation in the Trigeminal Ganglion Enhances Incisional Intraoral Pain. *Oral Dis* 31, 600-610, 2025.
2. Relationship between malnutrition according to the global leadership initiative on malnutrition criteria and oral health among community-dwelling elderly aged 85 years and older: a cross-sectional study. *BMC Oral Health* 24, 887, 2024.
3. Relation between number of teeth, malnutrition, and 3-year mortality in elderly individuals ≥ 85 years. *Oral Dis*, 29, 827-835, 2023.
4. Expression of the SARS-CoV-2 Receptor ACE2 and Proinflammatory Cytokines Induced by the Periodontopathic Bacterium *Fusobacterium nucleatum* in Human Respiratory Epithelial Cells. *Int J Mol Sci* 22, 1352, 2021.
5. Associations of poor oral health with frailty and physical functioning in the oldest old: results from two studies in England and Japan. *BMC Geriatr* 21, 187, 2021.
6. Involvement of Satellite Cell Activation via Nitric Oxide Signaling in Ectopic Orofacial Hypersensitivity. *Int J Mol Sci* 21, 1252, 2020.
7. Perceived swallowing problems and mortality risk in very elderly people ≥ 85 years old: Results of the Tokyo Oldest Old Survey on Total Health study. *Gerodontology* 34, 313-319, 2017.

局部床義歯学

〔主な研究テーマ〕

- ・部分床義歯へのインプラントの応用および社会歯科学的研究
- ・成熟脂肪細胞を用いた再生医療に関する研究
- ・新素材の部分床義歯への応用
- ・部分床義歯設計のための三次元有限要素法による分析

〔研究内容〕

当講座は主に部分欠損補綴治療（有床義歯補綴，インプラント，顎顔面補綴）を対象として，臨床的視点から包括的な研究を行っている。臨床系講座の研究活動は，その結果を治療・社会・歯科医学教育に還元することが最終目標である。そのために日常臨床に積極的かつ真摯に向き合い，湧出してくる研究テーマを追求する姿勢を尊重している。

超高齢化社会においてインプラントと部分床義歯の共存は喫緊の課題であり，インプラントの部分床義歯への応用に関する基礎および臨床的研究を行っている。また，新素材（ナノジルコニア，Peek 材）や CAD/CAM を応用した部分床義歯作製に関する研究にも着手している。

成熟脂肪細胞を用いた歯周組織（軟・硬組織）の再生は，可撤性・固定性およびインプラント補綴に多大な福音を与える。この分野は日本大学医学部との共同研究により一定の成果をあげており，今後さらに注目される研究分野である。その他，部分床義歯や顎義歯の適切な設計や適応症例拡大のため，有限要素法による三次元解析と模型実験や臨床データの集積を行っている。

当講座所属の大学院生は補綴診療を通して歯科医師としての修練，専門資格取得，臨床研究を遂行するに足る能力を修得することを目標とする。また，共同研究は学内の基礎系および臨床系講座との間で行われている。

〔最近の主な研究業績〕

1. Regeneration of Two-Walled Infrabony Periodontal Defects in Swine After Buccal Fat Pad-Derived Dedifferentiated Fat Cell Autologous Transplantation. *Biomolecules* 15, 604, 2025.
2. Influence of the coronavirus pandemic on domiciliary dental care and associated problems in Japan -A questionnaire study. *J Dent Sci* 20, 2375-2380, 2025.
3. Clinical evaluation of the relationship between systemic disease and the time of onset of peri-implantitis: a retrospective cohort study. *J Oral Implantol* 49, 55-61, 2023.
4. Transplantation of mature adipocyte-derived dedifferentiated fat cells facilitates periodontal tissue regeneration of class II furcation defects in miniature pigs. *Materials (Basel)* 15, 1311, 2022.
5. Dental implant status in elderly individuals requiring domiciliary dental care in Japan. *Int J Implant Dent* 7, 53, 2021.
6. Mechanical analysis of the effects of implant position and abutment height on implant-assisted removable partial dentures. *J Prosthodont Res* 64, 340-345, 2020.
7. Mechanical effects of residual bone mass, a maxillofacial prosthesis, and a reconstruction plate on the mandible after marginal resection. *J Oral Sci* 62, 377-381, 2020.
8. Ceria-Stabilized Zirconia/Alumina Nanocomposite for Fabricating the Framework of Removable Dental Prostheses: Preliminary Results from a 4-Year Follow-up. *Int J Prosthodont* 32, 254-256, 2019.
9. Transplantation of dedifferentiated fat cells combined with a biodegradable type I collagen-recombinant peptide scaffold for critical-size bone defects in rats. *J Oral Sci* 61, 534-538, 2019.

クラウン・ブリッジ学

〔主な研究テーマ〕

- ・デジタル歯科技術を応用した補綴処置
- ・セラミックス，間接修復用コンポジットレジン，各種合金の評価と臨床応用
- ・接着材料の評価と固定性補綴の臨床技法
- ・歯科器材と技術の臨床成績評価
- ・インプラント補綴装置の耐久性に関する研究

〔研究内容〕

歯冠修復および欠損補綴においては新素材と新技法が開発されているが，材料の特性を十分理解した上で適切な術式を選択し，治療効果を上げることが重要である。これに加えて，材料と術式を選択には的確な知識と根拠に基づく基準が必要である。当分野ではこのような観点からセラミックス，コンポジットレジン，レジン系接着材料，各種合金などの適切な応用方法を臨床に即した実験方法で検討することを目標としている。

クラウン・ブリッジ学に該当する歯科補綴学第Ⅲ講座の教員は総合歯学研究所高度先端医療部門の構成員としても研究を行っており，補綴治療には欠くことのできない歯冠色修復，接着歯科，特殊な補綴等の治療について，各症例を検討することで統括的見地に立った研究を行っている。その他に「補綴装置の耐久性」，「インプラント補綴装置に関する検討」，「デジタル歯科技術による補綴処置」などについての研究を継続中である。

当分野配属の大学院学生は，歯学部付属歯科病院において医員として，日本歯科専門医機構認定の補綴歯科専門医認定，臨床評価等に関係する症例をも担当する。このことを臨床歯科医師としての修練，資格取得，臨床研究のための布石としている。

共同研究は学内基礎系，臨床系講座，順天堂大学，University of Pennsylvania (USA)，University of Freiburg (Germany)，University of Geneva (Switzerland) との間で行われている。

〔最近の主な研究業績〕

1. Fracture resistance of premolar screw-retained implant-supported hybrid abutment crowns with monolithic restorations after thermomechanical aging. J Adv Prosthodont 18, 36-45, 2026.
2. Ten-year results of a prospective study on one-piece zirconia oral implants for single-tooth reconstruction. Clin Oral Implants Res 37, 33-44, 2026.
3. Changes of surface characteristics after toothbrush abrasion on light-cured shade-characterizing agents for CAD-CAM composite-resin block. Dent Mater J 44, 463-469, 2025.
4. One-piece zirconia oral implants supporting three-unit fixed dental prostheses: Ten-year results from a prospective case series. J Dent 160, 105911, 2025.
5. Assessment of bond strength and bioactivity on a prototype resin-based luting agent containing a novel bioactive monomer. Odontology 113, 1107-1118, 2025.
6. Influence of attaching mechanical retentive devices onto frameworks on fracture resistance of implant-supported zirconia crowns. Dent Mater J 43, 359-366, 2024.

口腔健康科学分野

Oral Health Sciences

感染症免疫学，衛生学，法医学，歯科放射線学，小児歯科学，口腔内科学，摂食機能療法学から成る。

感染症免疫学は歯周炎などの感染症およびその全身疾患への影響を，医科・歯科の臨床と連携し，宿主-寄生体関係の観点から解明する。衛生学は生化学的手法を駆使して，歯科疾患の予防に寄与できる研究を行う。加えて疫学を基礎とする社会歯科学的研究をも推進する。法医学は歯学の分野における個人識別，法律問題などを研究するが，遺伝子工学的手法を中心に当該分野における研究を展開する。歯科放射線学は頭頸部における画像診断および顎口腔領域の放射線治療に関する研究を行う。小児歯科学は発達成長期の患者に対する歯科診療の基礎となる，顎口腔機能解析，摂食能力等について研究する。口腔内科学は口腔顔面領域に発症する慢性疾患の診断，評価，治療に関する研究を行う。摂食機能療法学は障害・有病者への歯科診療の中で，摂食・嚥下障害の診断，評価，リハビリテーション手技および健康医学の構築に関する研究を行う。

本分野は社会医学の一分野である社会歯科学を含み，研究成果を国民の健康の保持増進に適切に反映させることを目標としている。従来の基礎，臨床と異なる領域，あるいは境界領域の分野を多く含む。

大学院担当教員一覧

分野	構成科目	教授	准教授	専任講師	助教
口腔健康科学分野	感染症免疫学	○今井 健一	◇田村 宗明 ◇神尾 宜昌		◇岡崎 章悟
	口腔衛生学 衛生学	○川戸 貴行	◇田中 秀樹	◇中井久美子	◇尾崎 愛美
	歯科法医学 法医学	○近藤 真啓			小方 彩乃 上原 怜
	歯科放射線学	○松本 邦史		◇澤田久仁彦 ◇江島堅一郎 ◇雨宮 俊彦 ◇出澤 幸	森山 鮎子
	小児歯科学	○菊入 崇		◇高森 一乗 ◇石山 未紗	伊藤 寿典 廣瀬 健佑
	口腔内科学	○野間 昇 ◇岡田 明子		◇篠崎 貴弘	◇河合 佳奈 滝澤 慧大
	摂食機能療法学	○米永 一理	◇阿部 仁子 ◇中山 潤利		◇木村 将典 大野 慎也

○印：研究指導教員 (㊟)，◇印：科目担当教員 (合)，無印：研究指導アドバイザー
(令和8年5月1日現在)

感染症免疫学

〔主な研究テーマ〕

- ・細菌—ウイルスの微生物間相互作用による呼吸器疾患，がん，及び歯周疾患発症機序の解明
- ・口腔疾患及び加齢を誘因とする新たな難治性全身疾患とその発症機序の解明
- ・疾患発症における潜伏感染ウイルスの役割と再活性化機序の解明
- ・高齢者及び周術期における全身疾患予防法としての新規口腔ケア法の開発と臨床応用
- ・リアルワールドデータ・ビクデータ解析による口腔と全身疾患との関連及び費用対効果の見える化

〔研究内容〕

ヒトの口腔には，800種を超える細菌が生息している。さらに，SARS-CoV-2，ヘルペスウイルス，インフルエンザウイルスやHIVなど多くのウイルスの感染，及び潜伏の場ともなっていることが明らかとなり，口腔における細菌とウイルスとの共感染が注目されつつある。しかし，感染症の発症と進展における共感染機構の解明は，国際的にも未着手なままである。

歯周病をはじめとする口腔感染症と全身疾患との関連が明らかとなる中，当講座では，「宿主—寄生物相互作用」研究に加え，「細菌—ウイルス相互作用」や「細菌—細菌相互作用」という新たな視点から，口腔細菌がウイルス感染症，呼吸器疾患，及びがんなどの難治性全身疾患に及ぼす影響について分子生物学的研究や動物モデル研究，さらには臨床研究を進めている。

最近では，歯周疾患の発症そのものにおいても，「細菌—ウイルス相互作用」が重要な役割を担うことを解明しつつある。また，研究成果を臨床に還元すべく，口腔ケア剤の開発を含めた新たな感染症予防策の構築や疫学・フィールド調査，さらにはリアルワールドデータ解析を通じて医科歯科連携の推進と口腔の重要性の見える化にも力を入れている。

微生物間，及び微生物と宿主との多彩なクロストークの解明が，歯学と医学に跨るトランスレーショナルリサーチとして科学の発展に貢献するのみならず，Evidence-based Medicineの実践にも寄与すると考え，国内外の多くの研究室と共同研究を進めている。

〔最近の主な研究業績〕

1. Establishment of a coculture system for *Porphyromonas gingivalis* and head and neck squamous cell carcinoma using spheroid culture and LATS inhibition. FEBS Open Bio, 16, 788-802, 2026.
2. *Porphyromonas gingivalis* gingipain potentially activates influenza A virus infectivity through proteolytic cleavage of viral hemagglutinin. J Biol Chem, 301: 108166, 2025.
3. Gut bacteria-derived membrane vesicles induce colonic dysplasia by inducing DNA damage in colon epithelial cells. Cell Mol Gastroenterol Hepatol, 17, 745-767, 2024.
4. *Fusobacterium nucleatum* putatively affects the alveoli by disrupting the alveolar epithelial cell tight junction, enlarging the alveolar space, and increasing paracellular permeability. Biochem Biophys Res Commun 682, 216-222, 2023.
5. SARS-CoV-2 Omicron variant in human saliva samples in cell-free form. JAMA Netw Open 6, e2250207, 2023.
6. Network analysis of the autophagy biochemical network in relation to various autophagy-targeted proteins found among SARS-CoV-2 variants of concern. J Mol Graph Model 119, 108396, 2023.

口腔衛生学, 衛生学

〔主な研究テーマ〕

- ・セルフケアに応用可能なレベルの超音波振動が歯肉線維芽細胞の成長因子産生に及ぼす影響
- ・歯肉線維芽細胞の増殖と機能に及ぼす植物由来の抗酸化成分の影響
- ・加熱式タバコ含有成分が骨芽細胞の骨形成能に及ぼす影響
- ・鉛等の化学物質が骨芽細胞と破骨細胞の細胞間相互作用に及ぼす影響
- ・マイクロプラスチックが歯周組織を構成する細胞の機能に及ぼす影響
- ・職域成人への歯科健康診断の実施形式と口腔の健康状態および保健行動との関連性に関する調査分析

〔研究内容〕

口腔の健康状態が全身と密接に関連するエビデンスが明らかにされつつある中、衛生学講座では歯科疾患の予防と健康増進を目指した研究を進めている。歯科疾患の1次・2次予防の観点からは、電動歯ブラシや植物由来成分のセルフケアへの応用が、外来刺激に対する宿主の抵抗性に好影響する可能性を細胞生物学的に検討している。また、歯槽骨代謝の中心的な役割を担う骨芽細胞と破骨細胞に関する研究では多くの成果を得ており、現在は、環境要因に着目した研究を行っている。すなわち、巻きタバコに比べて為害性が低いとのイメージが持たれている加熱式タバコの抽出成分、産業衛生における化学物質のリスクアセスメント面から注目される鉛等の化学物質、および手術器具やグローブを介した創面への汚染や環境からの血中移行の影響が懸念されるマイクロプラスチックなどの環境因子が、骨芽細胞と破骨細胞の増殖、分化およびそれらの機能に及ぼす影響の分析に着手している。さらに、職域において持続可能な歯科健康診断の在り方の検討に資するために、歯科健康診断と事後措置の実施形式と職域成人の口腔の健康と保健行動との関係性を明らかにする調査分析を実施している。

口腔衛生学は実践的な学問とされるが、その根底をなす基礎研究の知見について説明を求められる場面も多い。当講座での研究活動や国内外の学会での研究成果の発表等を通じて、理論を構築し説明する経験を重ね、人々の健康の維持増進に貢献するための能力を養ってもらいたい。

〔最近の主な研究業績〕

1. Inhibitory effect of *Bidens pilosa* extract on RANKL-induced osteoclast differentiation of RAW264.7 cells. J Hard Tissue Biol 33, 147-154, 2024.
2. The role of sodium fluoride mouthwash in regulating FGF-2 and TGF- β expression in human gingival fibroblasts. Biomedicine 12, 1727, 2024.
3. Effects of high glucose concentrations on HMGB1 expression in MG63 cells. J Hard Tissue Biol 33, 23-30, 2024.
4. Effects of electric-toothbrush vibrations on the expression of collagen and non-collagen proteins through the focal adhesion kinase signaling pathway in gingival fibroblasts. Biomolecules 12, 771, 2022.
5. Effect of azithromycin on mineralized nodule formation in MC3T3-E1 cells. Curr Issues Mol Biol 43, 1451-1459, 2021.
6. Lipopolysaccharide and high concentrations of glucose enhances zoledronate-induced increase in RANKL/OPG ratio by upregulating PGE₂ production in osteoblasts. J Hard Tissue Biol 30, 37-44, 2021.
7. Effects of interleukin-6 and tumor necrosis factor- α on the expression of angiogenic and collagenolytic factors in premature and mature adipocytes. Biochem Biophys Res Commun 531, 297-304, 2020.
8. Effect of periodontitis and toothbrushing frequency on obesity onset: a cohort study. Med Sci Monit 25, 9712-9720, 2019.
9. Continuous application of compressive force induces fusion of osteoclast-like RAW264.7 cells via upregulation of RANK and downregulation of LGR4. Life Sci 201, 30-36, 2018.
10. 職域成人における口腔清掃習慣と歯周ポケット形成との関連性—産業歯科健診情報を活用したコホート研究—. 日本口腔衛生学会雑誌 68, 21-27, 2018.

歯科法医学, 法医学

〔主な研究テーマ〕

- ・ 歯および口腔粘膜から抽出したゲノムDNAのメチル化レベルに基づく年齢推定法の開発
- ・ 児童虐待の存否を証明するための新規分子マーカーの探索
- ・ DNA型検査による歯からの個人識別
- ・ デジタルX線写真およびX線CT画像を利用した年齢推定
- ・ 歯科所見からの個人識別

〔研究内容〕

法医学における個人識別は、身元不明遺体の個人同定や犯罪現場に遺留された分泌物・排泄物が誰に由来するかの特定など多岐にわたる。

近年、DNA分析技術の進歩により、法医実務における個人識別の手法は大きく変貌しつつある。特に、DNA多型の情報は、民事・刑事裁判で重要な証拠資料として採用されている。

当講座では、陳旧化した歯髄や唾液斑からDNAを抽出し、検査対象となるゲノム領域をPCR法により増幅し、個人識別または性別判定を実施している。また、歯や口腔粘膜から抽出したDNAのメチル化状態を指標に、暦年齢や喫煙・飲酒などの生活習慣を推定する手法の開発に取り組んでいる。さらに昨今、社会で問題視されている児童虐待（ネグレクト）について、その被害の有無を科学的に証明するための新規分子マーカーの探索も行っている。

一方、形態学的情報を用いた個人識別法の研究も行っている。当講座で考案した歯、口蓋および頭蓋の計測値を利用した統計的手法による性別判定法や、数量化理論を応用した歯の咬耗および処置状態に基づく年齢推定法は、法医鑑識の実務で活用され、成果を挙げている。

また、証拠保全の立場から、デジタルX線やX線CT画像を利用して歯髄腔の狭窄程度を非破壊的に画像計測し、年齢推定の回帰モデルの構築を試みている。さらに、審美歯科修復材料の成分分析結果をデータベース化し、製品を識別することで身元不明死体の歯科情報に利用する研究も行っている。

そのほか、本学医学部法医学分野での法医解剖における口腔内検査などにも協力している。

〔最近の主な研究業績〕

1. Tobacco smoking influences ELOVL2 methylation in buccal cells without affecting age estimation accuracy. *J Hard Tissue Biol*, in press.
2. Effect of early-life stress on LINE-1 in animal model of child neglect. *Biochem Biophys Res Commun* 763, 151787, 2025.
3. The mouse model of intellectual disability by ZBTB18/RP58 haploinsufficiency shows cognitive dysfunction with synaptic impairment. *Mol Psychiatry* 28, 2370-2381, 2023.
4. 母子分離ストレスによるマウス脳由来ゲノムDNAのメチル化変化. *日大歯学* 96, 107-113, 2022.
5. Dental age estimation based on DNA methylation using real-time methylation-specific PCR. *Forensic Sci Int* 340, 111445, 2022.
6. Extracellular signal-regulated kinases (ERK) 1 and 2 as a key molecule in pain research. *J Oral Sci* 62, 147-149, 2020.
7. A newly developed age estimation method based on CpG methylation of teeth-derived DNA using real-time methylation-specific PCR. *J Oral Sci* 63, 54-58, 2020.
8. Comparison of air dose and operator exposure from portable X-ray units. *Leg Med* 47, 101787, 2020.

歯科放射線学

〔主な研究テーマ〕

- ・ MDCT, 歯科用CBCT, MRI, 超音波画像の精度解析, 歯顎顔面領域の疾患の病態解析
- ・ 顎関節疾患に関する歯科用CBCTおよびMRIによる病態解析
- ・ 顎顔面疾患のAI診断に関わる研究
- ・ 歯科X線検査時の放射線被曝に関する研究
- ・ ICTを利用した遠隔画像診断システムの研究
- ・ *in vivo* micro-CTによる実験動物の頭頸部の画像形態学的解析

〔研究内容〕

当講座では、画像検査装置の精度解析や各種機器を用いた新しい手法での病態解明を行っている。また、早くから顎関節の臨床画像診断の研究に力をいれており、通常の X 線検査に加え、MRI, 内視鏡, 超音波検査などの数多くの画像検査を用いた顎関節診断と Interventional Radiology を行っており、国内外で臨床、研究ともに高い評価を得ている。また、新たな臨床研究分野として、ICT を利用した遠隔画像診断や AI 診断の研究も開始している。

基礎研究として、実験動物用 *in vivo* micro-CT を使用し、実験動物の硬組織疾患や成長に関わる疾患の病態メカニズムの解明を行っている。これらの分析ソフトの開発も独自に行っている。これらの研究テーマは、いずれも臨床に直結した課題であり、臨床と基礎の掛け橋となる研究に取り組んでいる。

当講座では、大学院生は原則、在学中に国際学会、impact factor を有する国際学術雑誌に筆頭者として発表し、学位請求論文審査に関する要項に基づき、学位申請できるよう指導している。

歯科放射線学は、更なる発展が期待できる研究分野・テーマが多く、若いドクターの活躍の場も広い。OB は本学・他大学の教員、研究所の研究員、医系技官、一般歯科の開業など様々な分野で活躍しており、卒業後の選択肢が多いことも当講座の特徴である。

さらに特筆すべきは、開設 102 年の世界で最も歴史のある歯科放射線学講座でこれまでパノラマ X 線検査, 歯科用 CBCT などの開発を行い、世界のトップブランドとして国際的にも評価されている。こうした実績をもとに、オスロ大学、ラオス科学大学と積極的な国際交流を行っている。今後も世界の歯科医療の進歩のため、講座員一丸となって日々努力をしている。我々と一緒に歯科医学を一步前へ進めてみませんか。

〔最近の主な研究業績〕

1. Optimal elevation distance of the X-ray focus in vertical dual-exposure panoramic radiography for mitigating ghost images of cervical vertebrae in the upper incisor region. *Oral Radiol.* 2026. in press.
2. Reduction of cervical vertebra ghost images in panoramic radiography using vertical dual exposure. *J Oral Sci* 66, 37-41. 2024.
3. Vertical magnification correction in vertical dual-exposure panoramic radiography. *J Oral Sci* 66, 70-74. 2024.
4. Reduction of scratch or dirt artifacts on intraoral radiographs using dual imaging plates in image processing. *Oral Radiol* 39, 386-393. 2023.
5. Correction of intraoral radiography with dual imaging plates using enlargement of the horizontal direction with division into 12 blocks. *J Oral Sci* 65, 40-43. 2023.

小児歯科学

〔主な研究テーマ〕

- ・顎舌運動を制御する中枢の発達とそのメカニズム
- ・発達期の口腔感覚特性と中枢での処理メカニズム
- ・幹細胞における未分化維持機構の解析

〔研究内容〕

乳幼児期からの口腔機能の健全な発達は、生涯にわたる健康の維持に極めて重要である。出生時あるいは乳幼児期に中枢神経系に何らかの障害がみとめられる小児では、摂食機能にも発達の遅れを生じることが多い。しかし口腔領域にみられる各種機能の遅滞の病態については未だ不明な点が多く、感覚情報処理、食欲の調節、舌運動や顎運動の遂行、運動調節のフィード・バック機構等について多面的な研究が必要とされている。また健常児についても、何らかの原因で長期にわたり口腔機能の低下がみられることがあり、その場合の治療や長期的予後の向上には最新の知見に基づく治療法の開発が必要である。

小児歯科学においては上記の3テーマを設定しており、大学院生はそのいずれかに関連する研究課題を指導担当者と協議の上決定し、研究を行う。大学院の講義では、顎や舌の運動を制御する中枢の発達についての実験的アプローチ、小児期にみられる呼吸・咀嚼・嚥下機能の異常の原因とそれらに対して有効とされる治療法、実験動物や培養細胞を用いた個体レベル・細胞レベルでの研究法など、さまざまな手法とその手順を説明する。またエピジェネティクスに関連する研究法として、遺伝子導入法、遺伝子ノックダウン法、細胞の分化誘導法、オミックス解析法等について説明する。

なお大学院生の論文発表については、在籍中に少なくとも1編を impact factor を有する英文誌に掲載することを原則とする。

〔最近の主な研究業績〕

1. Synaptic function of descending projections from the insular cortex to the nucleus solitary tract in the rat. *Brain Res* 1; 1870: 150061, 2026.
2. Hypoxia enhances osteoclastogenesis in periodontal ligament cells via expression of VEGF and RANKL. *Pediatr Dent J* 35, 100336, 2025.
3. Differential regulation of medium spiny and cholinergic neurons in the nucleus accumbens core by the insular and medial prefrontal cortices in the rat. *Pflugers Arch* 473, 1911-1924, 2021.
4. Presynaptic NK1 receptor activation by substance P suppresses EPSCs via nitric oxide synthesis in the rat insular cortex. *Neuroscience* 455, 151-164, 2021.
5. Microglial activation in the trigeminal spinal subnucleus interpolaris/caudalis modulates orofacial incisional mechanical pain hypersensitivity associated with orofacial injury in infancy. *J Oral Sci* 63, 170-173, 2021.
6. Early postnatal treatment with valproate induces *Gad1* promoter remodeling in the brain and reduces apnea episodes in *Mecp2*-null mice. *Int J Mol Sci* 20, 5177, 2019.
7. Effect of hypoxia on the expression of CCAAT/enhancer-binding protein β and receptor activator of nuclear factor kappa-B ligand in periodontal ligament cells. *J Oral Sci* 60, 544-551, 2018.
8. Hypoxia-induced upregulation of angiogenic factors in immortalized human periodontal ligament fibroblasts. *J Oral Sci* 60, 519-525, 2018.

口腔内科学

〔主な研究テーマ〕

- ・バーニングマウス症候群（舌痛症，以下BMS）の病態解明に関する研究
- ・非歯原性歯痛における疼痛の慢性化メカニズム，ならびに中枢・末梢感作に関する研究
- ・特発性口腔顔面痛の病態の理解と，診断・治療法の確立に関する研究

〔研究内容〕

口腔の痛みは，歯科を受診する患者さんの主要な症状ですが，しばしば病態の診断がつかず，不適切な治療が繰り返されることがあります。歯科治療で症状が改善しなかった場合，患者さんはさらなる歯科治療を繰り返すか，隣接医科を受診することになりますが，それでも診断がつかず，行き場を失うことも少なくありません。当講座では，このような原因不明の疼痛で苦しむ患者さんを救うべく，臨床に直結した研究を行っています。

特発性口腔顔面痛の病態生理について中枢性感作や脳内の疼痛処理過程の変調の報告があり，脳機能画像研究においても，特発性口腔顔面痛は線維筋痛症や過敏性大腸症候群などの慢性疼痛疾患と同様に，中枢の疼痛処理過程で疼痛が増強されている可能性を示しています。当講座では，fMRI（機能核磁気共鳴画像）を用いた研究において，BMS および PIDAP の患者さんにおいては痛みの認知，情動に関わる部位に脳活動の修飾がみられることを明らかにしてきました。BMS による慢性的な疼痛（ストレス）が持続すると，脳内の口腔からの刺激に対応する部位において，疼痛に対する応答にも可塑的な変化が生じるようになり，疼痛を制御する自己調節機能にも修飾が加わることが示唆されています。一方，PIDAP では健康成人と比較し下降性疼痛抑制が減弱し，さらに病悩期間が1年以上の患者では下降性疼痛抑制が大きく減弱する。以上 BMS や PIDAP などの慢性口腔顔面痛疾患の病態を解明するために，中枢神経に着目して，口腔の慢性痛患者さんにおける疼痛の発生，伝達，調節までを含めた総合的な解析に取り組んでおります。

〔最近の研究業績〕

1. Effects of ovariectomy of rat on tongue neuropathy: Relevance to burning mouth syndrome. J Dent Sci 21, 177-183, 2026.
2. Effects of Autogenic Training on Pain Modulation in Burning Mouth Syndrome: A Preliminary Study. Cureus 17, e80549, 2025.
3. Relationship between burning mouth disorder and gastroesophageal reflux disease: A scoping review. Oral Dis, 30, 3600-3609, 2024.
4. Worldwide prevalence estimates of burning mouth syndrome: A systematic review and meta-analysis. Oral Dis. 28, 1431-1440, 2022.
5. Association between anxiety and descending pain modulation of thermal stimuli in patients with burning mouth syndrome: a cross-sectional study. J Oral Facial Pain Headache 36, 67-77, 2022.
6. Potential differences in somatosensory function during premenopause and early and late postmenopause in patients with burning mouth syndrome: An observational case-control study. J Dent Sci 17, 399-406, 2022.
7. A perspective from experimental studies of burning mouth syndrome. J Oral Sci 62, 165-169, 2020.
8. Time-dependent responses in brain activity to ongoing hot stimulation in burning mouth syndrome. J Oral Sci 62, 170-174, 2020.

摂食機能療法学

〔主な研究テーマ〕

- ・ イートロス（食べられない状態が続くこと）への対応と低栄養・カヘキシア予防法の研究
- ・ 医市連携を通じた食支援医学の社会実装および口腔緩和医療・終末期歯科医療の確立
- ・ 口腔機能発達不全症における小児の舌圧・咀嚼機能の発達の関連性の解明
- ・ 施設入所者における咀嚼機能の低下要因の解明
- ・ オーラルフレイル・口腔機能低下症に対するリハビリ装具の開発 等

〔研究内容〕

超高齢社会を迎え、「食べられない」患者が増え、食べられない状態が続くこと（＝イートロス）で生じる低栄養と、その先にあるカヘキシアへの対応が喫緊の課題である。そこで、われわれはイートロスの診断／予防／治療の体系化を目指し、「食べる」を科学する研究をおこなっている。

現在摂食機能療法に関わる臨床では、外来だけでなく訪問診療の需要が高まっており、要介護高齢者や有病高齢者への対応が必須となっている。そのような中で、歯学・医学ではオーラルフレイルや口腔機能低下症、さらに口腔・摂食機能障害に至るまでの流れが示され、2018年には「口腔機能低下症」と「口腔機能発達不全症」という口腔機能障害に関わる新しい病名が導入された。

一方で人が生きる根幹である「食べる」ことは、様々な要因と多彩な領域が複雑に絡み合うため、未解明なクリニカルクエッション（臨床的疑問）も多い。そしてこの分野の課題は、口腔・摂食機能が低下する高齢者の問題だけでなく、正常な口腔機能の発達を獲得できない子どもの問題でもある。つまり、摂食機能療法は、幅広い世代を対象として深化しつつあり、さらなる発展が想定され、われわれが果たす社会的な使命は大きい。

よって、摂食機能療法学では、『「食べる」を通じて各領域の結節点となり、医学的歯学を实践すること』を理念として、関連する知識・技術をシームレスに習熟できるよう努めている。そのために、基礎的な研究手法を身に付けることを推奨し、食支援に関わる多職種連携と、その先にある医市連携（医療と市民、市場、市政との連携）を推進している。さらに、口腔緩和医療や終末期歯科医療等の未開の分野の確立にも挑戦し、次世代の歯科界を担う人材育成を目指している。

〔最近の主な研究業績〕

1. Assessment of tongue condition in healthy adults: Examination from the perspective of Oriental medicine. *Oral Sci Int*, 22(2) e1292 2025.
2. Effect of cognitive decline on mandibular movement during mastication in nursing home residents. *J Clin Med* 13, 6040, 2024.
3. Weight loss and functional decline in older Japanese people: A cohort study using large-scale claims data. *Arch Gerontol Geriatr* 120, 105354, 2024.
4. Evaluation of the improvement of laryngeal penetration using complete lateral position through videoendoscopic evaluation of swallowing in patients with dysphagia. *Oral Sci Int* 21, 78-83, 2024.
5. Kinematic features of mandibular movement during mastication in geriatric individuals who are provided with a dysphagia diet at long-term care facilities. *Nutrients* 15, 2273, 2023.
6. Saturation of percutaneous oxygen decreases with meal consumption in patients with acute pneumonia. *Tokai J Exp Clin Med* 48, 123-127, 2023.
7. Platysma bands are associated with laryngeal penetration in older adults with suspected dysphagia. *Journal of Hospital General Medicine* 5, 217-225, 2023.
8. Risk of post-extraction bleeding with direct oral anticoagulant compared with warfarin: Retrospective cohort study using large scale claims data in Japan. *Thromb Res* 222, 24-30, 2023.
9. Implications for clinical dental practice during the coronavirus disease pandemic: a scoping review. *J Prosthodont Res* 66, 6-11, 2022.
10. Association of oral function and dysphagia with frailty and sarcopenia in community-dwelling older adults: a systematic review and meta-analysis. *Cells* 11, 2199, 2022.

4. 学位（博士）論文審査

(1) 予備審査

資 格 4年次であって、所定の単位修得見込の者で、筆頭著者である原著論文1編以上を有する者。

時 期 4年次の4月1日から1月末日までの間。

予備審査委員 大学院歯学研究科分科委員会委員3名以上。

(2) 審査請求

学位審査請求の可否は、予備審査の結果をもとに、大学院歯学研究科分科委員会において決定。

(3) 学位論文審査及び最終試験

主査1名、副査2名以上からなる審査委員会において、論文内容の審査及び関連事項についての口頭試問の実施。

(4) 学位授与決定

学位授与の可否は、大学院歯学研究科分科委員会において審議し、研究科長の内申に基づき学長が決定。

5. 奨学金制度

(1) 古田奨学金（給付）

年額20万円（対象：2～4年次生1名）

(2) ロバート・F・ケネディ奨学金（給付）

年額20万円（対象：2～4年次生1名）

(3) 歯学部佐藤奨学金第3種奨学生

50万円を限度とし海外における学会発表の経費を補助（対象：2～4年次生若干名）

(4) 歯学部同窓会奨学金

年額5万円（対象：2～4年次生 若干名）

(5) 日本学生支援機構奨学金（貸与）

第一種 月額8万円又は12万2千円（対象：1～4年次生）

第二種 月額5万円～15万円（対象：1～4年次生）

勉学に励む意欲があり、経済的理由で修学が困難な者に対し、日本学生支援機構が貸与する。

(6) その他、公・私各種機関からの奨学金制度あり。

6. リサーチ／ティーチング・アシスタント制度

歯学部が行う研究プロジェクト等の研究活動の補助業務を行う優秀な学生をリサーチ・アシスタントとして採用する。研究活動の補助業務に従事することにより手当を支給する。また、将来歯学教育の指導者となるため、優秀な学生をティーチング・アシスタントとして採用する。教育補助業務に従事することにより月額4万円を支給する。

7. 海外派遣制度

(1) 日本大学大学院海外派遣奨学生

派遣期間	原則として1年
給付奨学金	180万円を限度として支給
単位の取扱い	履修単位は日本大学学則の定めによる。

〔実績（過去10年）〕

平成26年度	第3年次	梶 佳 織（歯科矯正学）	ピッツバーグ大学
平成27年度	第3年次	渡 瀬 哲 郎（歯内療法学）	トロント大学
	第3年次	大久保 貴 久（局部床義歯学）	カリフォルニア大学
平成28年度	第3年次	齋 藤 弘 人（総義歯補綴学）	ミネソタ大学
平成29年度	第3年次	陳 睿 妍（生理学）	国立台湾大学
平成30年度	第3年次	赤 坂 竜 太（口腔外科学）	トロント大学

(2) その他、公・私各種機関からの海外派遣制度あり。

8. その他

(1) 日本大学歯学会主催の学術講演会（5月開催）

(2) 日大歯学（日本大学歯学会の機関誌）と Journal of Oral Science（日本大学歯学部の英文研究紀要）

◇ Journal of Oral Science は研究紀要であるが、Web of Science 及び PubMed にも掲載されていることから、本研究科では国際的な学術雑誌のひとつとして位置づけている。

(3) 本研究科関連行事

- ・ 定期健康診断（5月実施）
- ・ 研究中間報告会（3年次前期）
- ・ 学位論文の作成及び学位申請に関する講義（3年次後期）

令和9年度 日本大学大学院歯学研究科概要
令和8年6月1日発行

日本大学大学院歯学研究科
〒101-8310 東京都千代田区神田駿河台 1-8-13
電 話 03-3219-8002 (教務課)
